

慶應義塾大学教養研究センター主催

第三回 社会・地域連携セミナー

大学教育と社会地域連携のありかたを考える

2012年1月26日（木）14：00～17：45

慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎1階 シンポジウムスペース

第3回 社会・地域連携セミナー「大学教育と社会地域連携のありかたを考える」

- 14:00 開会：司会 種村和史（教養研究センター副所長、商学部教授）
- 14:10～14:15 挨拶：不破有理（教養研究センター所長、経済学部教授）
- 14:15～14:30 講師紹介、本日の内容、進め方（種村和史）
- 14:30～15:10 「システムズ・アプローチによる地域活性化：慶應SDMの取り組み」
保井俊之（先端研究センター特任教授）
- 15:10～15:50 「専門の壁を越える取り組みから」
和気洋子（商学部教授）
- 16:00～ コメンテーターによるコメントおよび討議

講師

保井 俊之

慶應義塾大学先端研究センター「環境共生・安全システムデザインの先端拠点」特任教授

1962年生まれ。東京大学教養学部（国際関係論）卒業後、旧大蔵省へ。金融庁参事官、中央大学客員教授等を経て現職。国際基督教大学博士（学術）。米国PMI認定Project Management Professional。政策研究大学院大学客員教授を兼務。主な著書に『中台激震』（中央公論新社）、『保険金不払い問題と日本の保険行政』（日本評論社）、『「日本」の売り方：協創力が市場を制す』（角川oneテーマ21新書）。

日本コンペティティブ・インテリジェンス学会より、2010・11両年度に同学会「論文賞」を受賞。

講師

和気 洋子

慶應義塾大学商学部教授

1947年生まれ。慶應義塾大学大学院商学研究科後期博士課程単位取得退学後、富士銀行国際部を経て現職。ロンドン大学LSE経済学部訪問研究員併任。日本国際経済学会、環境経済・政策学会所属。

主な著書に『EUの公共政策』（共編著）、『地球温暖化と東アジアの国際協調——CDM事業化に向けた実証研究』（共編著）（共に慶應義塾大学出版会）、『地球環境問題とグローバル・コミュニテイ』（共著）（岩波書店）、“*Climate Change 2001 -Mitigation*”, *Contribution of Working Group III to the Third Assessment Report of the Intergovernmental Panel on Climate Change*（共著）（University Cambridge Press）。

司会

種村 和史 慶應義塾大学商学部教授

コメンテーター

飯盛 義徳 総合政策学部准教授

羽田 功 経済学部教授

牛島 利明 商学部教授

はじめに

教養研究センター副所長 種村 和史

本日は学年末の学事その他のお仕事で御多忙のところ、第3回社会・地域連携セミナーに御参集いただき、まことにありがとうございます。

この社会・地域連携セミナーは、教養研究センターが社会・地域と連携した教養教育を展開していくための総合的なビジョンを作り上げること、また、慶應義塾における社会・地域連携活動をより発展させていくために各キャンパスがどのように協力していくべきか、塾としてどのようなサポート体制が必要かについて提言をまとめることを目的として開かれています。

第一回のセミナーでは、教養研究センターを中心として、日吉キャンパスで現在進行している社会・地域と連携した教育活動の試みについて、それぞれの特色と直面している問題をご報告いただきました。現在、日吉キャンパスでは各先生方の努力により、特色のある優れた活動が数多く行われていることを知りました。それと同時に、各活動が共通の問題に直面しており、それは個別の活動任せでは解決が難しいことも認識しました。各活動をより合理的かつ安定的に運営するためには、教養研究センター、そして日吉キャンパスの社会・地域連携活動という総合的な視野のもとで連携の仕組みを構築することが必要です。また、慶應義塾としてのサポート体制も早急に強化することも必要です。

ところで、一口に社会地域と連携した教育活動と言っても、慶應義塾においては各キャンパスの性格と使命によって、多種多様な活動が展開されています。日吉は、主に大学1・2年生を対象とした教養教育を使命とするキャンパスです。社会・地域連携活動のあり方を考える上でも、やはりこのキャンパスの性格と使命に基づいたものが目指されるべきでしょう。そのために、まずは視野を慶應義塾全体に広げ、各キャンパスで行われている社会・地域連携活動の実態を把握した上で、日吉の、また教養研究センターの進むべき道を考えていかなければなりません。

このような考え方にに基づき、第二回のセミナーでは、SFCの活動についてご報告いただきました。金子郁容先生、本日コメンテーターとしてご出席の飯盛義徳先



種村 和史氏

生、そして、それから飯盛ゼミの学生たちに、SFCの社会・地域連携活動を熱く語っていただきました。既存の「枠」とらわれず自ら問題を発見し解決する、社会と連動した実学を追究するSFCの姿勢、それをキャンパス全体で運営しサポートするSFCの体制に圧倒される思いでした。

第三回の本日は、三田キャンパス、そして同じ日吉にありながら交流の機会がなかなかない協生館のSDM（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科）、この二箇所において、どのような社会・地域連携活動が行われているかについてお話しいただきます。三田キャンパスは、主に文系4学部3・4年生および大学院生が学ぶ場であり、SDMは、大学院生、特に一度社会に出た経験のある人を大学院生として多く受け入れて研究教育活動が行われています。大きく言えば、両者とも専門的研究、および研究成果を用いた社会実践という側面に主眼を置いた活動が行われているのではないかと思います。その意味で、我々の活動とは異なった性格の活動のお話が聞けるのではないかと思います。

本日は、まず先導研究センター特任教授の保井俊之先生にSDMの地域活性化の活動についてお話しいただきたいと思います。先日、今日のセミナーの打ち合わせのために保井先生にお話を伺ったところ、SDMで

は文系と理系、両方にまたがるような形での研究教育活動が展開されていて、社会地域をフィールドとした研究教育が活発に行われているそうです。しかも非常に驚いたのですが、SDMでは「システムズ・アプローチ」という、問題発見、問題解決、そして評価に渡って、きわめてシステマティックなメソッドを作り上げており、それに基づいた活動が行われていると伺いました。そのような活動の一端をご紹介いただくことで、教養研究センターの活動を計画したり、活動の自己評価をしたりする上にも参考になるお話が聞けるのではないかと期待しております。

その後、商学部の和気洋子先生に、先生が長年取り組んで来られた活動を中心にお話しいたします。和気先生は商学部の先生でいらっしゃいますが、商学部だけに留まらず、あるいは慶應義塾だけに留まらず、社会と連携した様々な活動をなさってきた先生です。たとえば、中国の東北における植林プロジェクトや、それから福澤文明塾での、社会人を受け入れた教育活動を行っておられます。そういったご経験に基づき、大学が社会と関わるということにつきまして、大きな見地からお話をいただけたと思います。

お二人の講師の講演に続いて、飯盛先生、羽田先生、それから牛島先生の三人のコメンテーターからコメントをいただき、その後、質疑・討議を行います。この連続セミナーは、四回のセミナーが計画されています。今日が三回目ですけれども、四回目のセミナーでは、三回のセミナーに基づきまして、教養研究センターの社会地域と連携した教育の総合的ビジョンをまとめるとともに、慶應義塾大学の社会地域連携についての具体的な提言をまとめまして、公開のセミナーを開催する予定です。本日の討議では、そのための議論を深めたいと思いますので、皆様の積極的な議論を期待しております。

システムズ・アプローチによる地域活性化：慶應 SDM の取り組み

発表：保井俊之（先導研究センター特任教授）

慶應義塾大学教養研究センター主催 第3回社会・地域連携セミナー
「大学教育と社会地域連携のありかたを考える」

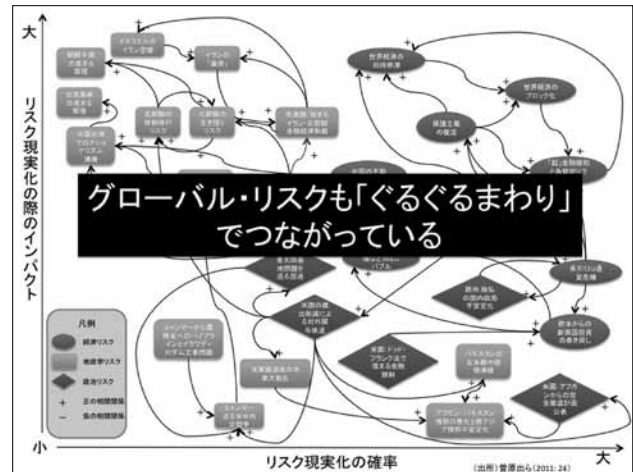
システムズ・アプローチによる地域活性化：慶應SDMの取り組み



2012年1月
慶應義塾大学先導研究センター「環境共生と安全のシステムデザインの先導拠点」特任教授(在 慶應SDM)
保井俊之 (t.yasui@z2.keio.jp)

(写真出所)リンクwithふくしま主催「ふくしま未来ミーティング」(2011年12月11日)で撮影撮影

1



4

問題は世界とつながっている

エネルギー 地球温暖化
問題
自然災害
南北問題
貧困
経済破綻
宗教対立
戦争
事件
事故
国際紛争



(出所)新野隆司(2011)「ふくしま未来ミーティング」
(2011年12月11日)講演スライドを筆者が一歩修正

2

日本の問題：

激動する現代社会が直面する問題の多くは、問題をシステムとして俯瞰的視点からとらえ、全体として整合性のある解を導くべき問題なのに、誰もそれができないこと。

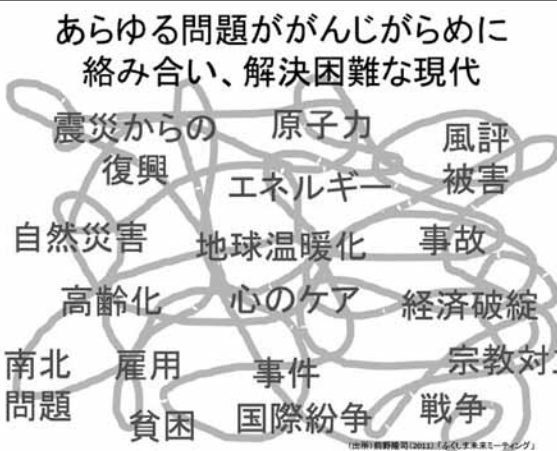
安心・安全 震災 原子力 環境問題
小児高齢化 外交 農業 TPP 雇用 教育
領土問題 防衛 資源 技術のガラパゴス化
国家財政破綻 セキュリティ 国際競争力の低迷
格差 年金 国家ビジョン 理系離れ

(出所)新野隆司(2011)「ふくしま未来ミーティング」
(2011年12月11日)講演スライド

5

あらゆる問題ががんじがらめに絡み合い、解決困難な現代

震災からの復興 原子力 風評被害
エネルギー 事故
自然災害 地球温暖化
高齢化 心のケア 経済破綻
南北問題 雇用 事件 宗教対立
貧困 国際紛争 戦争

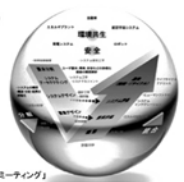


(出所)新野隆司(2011)「ふくしま未来ミーティング」
(2011年12月11日)講演スライド

3

慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科とは？

システムズエンジニアリングを基盤に、複雑に絡み合った問題を、様々な者の連携により、システムとして全体最適の視点から解決する、分野横断型・文理融合型・連携推進型の大学院。

(出所)新野隆司(2011)「ふくしま未来ミーティング」
(2011年12月11日)講演スライド

6

慶應SDMの地域活性化プロジェクト

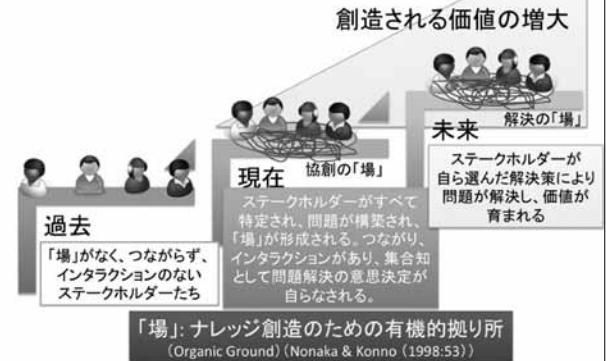
- ・ システムズ・アプローチ
 - システム思考×デザイン思考×マネジメント思考
 - 「つながりを見つけ出す力」×「つながりを創りだす力」×「つながりを段取る力」
- ・ システムズ・アプローチによる地域活性化
 - コミュニティが本来持っているはずの「つながる力」を見つけ、デザインし、段取ること
 - シークエンシャルな工学的的方法論と地域住民の声の共有手法の組み合わせ



「つながる」ことでパワーが出る
(写真出所)NPO「てとる」(食会 2011年4月)で撮影撮影

7

参加型システム分析(PSA): 価値協創の場への参加



10

つながる力: システムズ・アプローチ

- ・ システムズ・アプローチ (Jackson (2010:29-31))
 - 個々の要素では見えてこない問題を、要素同士のつながりとして考え、問題を発見する全体論的アプローチ
 - ・ 「木を見て森も見る」こと
- ・ システムには創発性がある
 - システムであるがゆえに初めて発現する特長
 - ・ 仮に一頭の牛を真二つにしても、二頭の牛にはならない
 - ・ 人間は60兆個の細胞から構成される。一年間で90%以上の細胞が入れ替わるのに、ひとは同じひとであり続ける(永田和宏(2008))

8

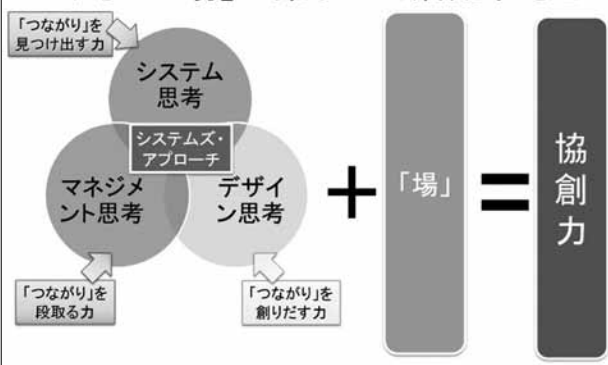
日本: 無名の人の「つながり力」の凄さ

- ・ 3-11で示した日本の社会システムの安定とresiliencyの高さ (Shimizu & Clark (2011))
 - 「つながろうとする日本の無名の人たちが維持
 - ・ 忍耐強く、かつ礼儀正しく行動する帰宅困難者
 - ・ 危険な現場に自ら志願、黙々と職責果たす警察、消防、自衛隊、電力関係者。
 - ・ 避難所で自助率先の被災者
 - ・ ツイッターやSNS活用の若手ボランティア
 - 日本の社会システムの「つながり力」の伝統的高さ



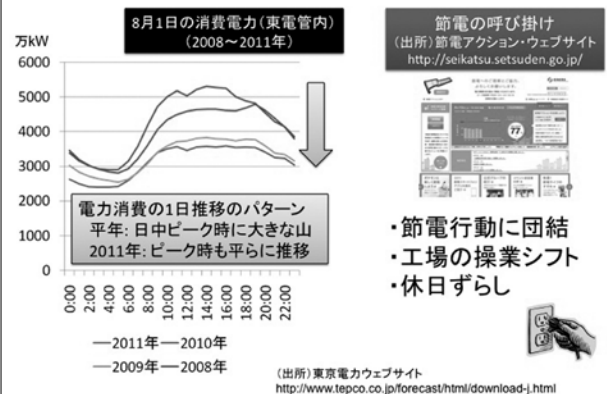
11

システムズ・アプローチを みな「場」に集まって活用すると

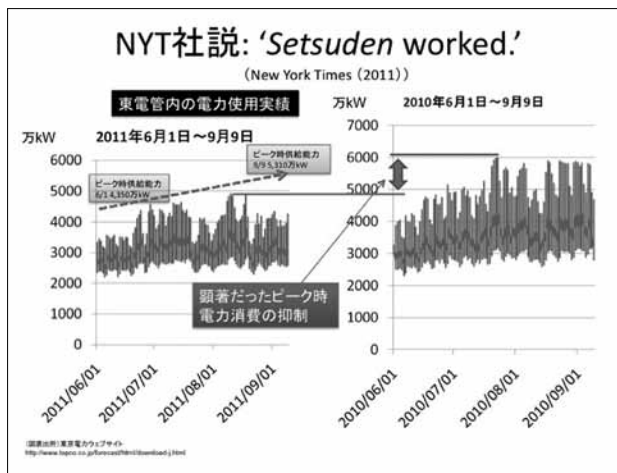


9

「つながり」で変えた: 電力消費パターン

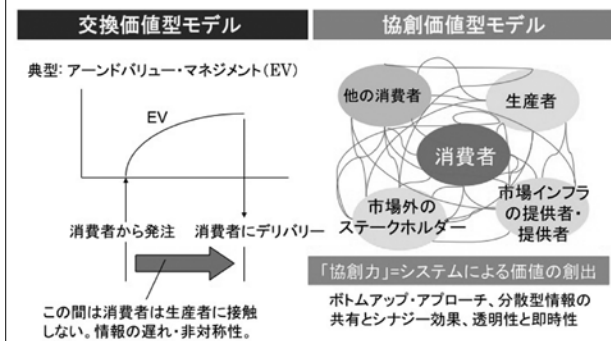


12



13

価値交換から価値協創へ: グーグル・アップルなども実践する最新モデル



16

慶應SDM参加の社会地域連携型節電プロジェクト

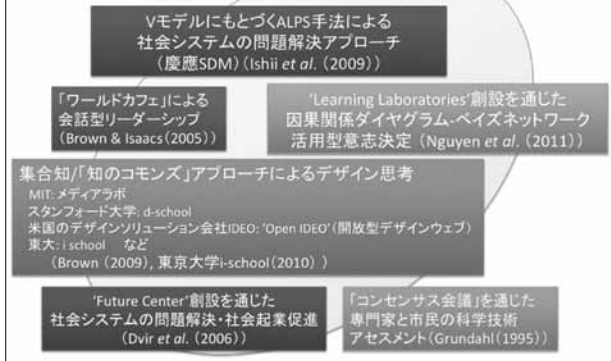
配布した節電アプリとスマートフォン画面例

- 2011年7～10月、慶應SDM、東急、日本IBMなど5機関が「停電回避プロジェクト・コンソーシアム」立ち上げ
- 二子玉川駅周辺で、節電に向けたコミュニティの「つながり力」の社会実験実施
- 節電を動機付けるアプリを無料配布、80万人がダウンロード。スマートフォンでモニター

(出所)慶應義塾ウェブサイト
http://www.keio.ac.jp/ja/press_release/2011/07/04/3000006g0w-art/110630_1.pdf

14

参加型システム分析 (PSA): 最近の方法論 (例示)



17

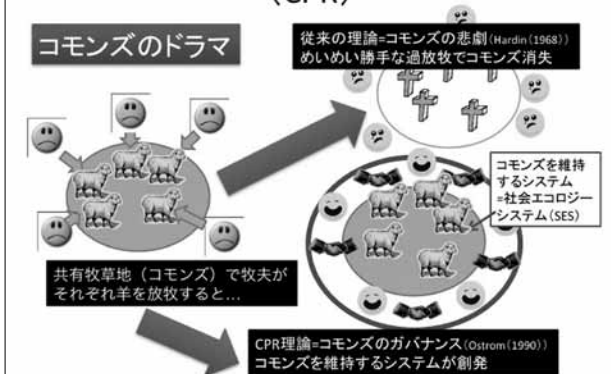
社会システム: 協創のシステム

- ソフトシステムズ・メソドロジー (SSM) (Checkland and Scholes (1990)) の社会システム
- 人工システム (Artificial System)
 - 人間が作成したもので、システムとして認識でき、認識したほうが取扱いやすいもの
 - 例: 自動車、コンピュータ・プログラム、法律、数学
- 人間活動システム (Human Activity System)
 - 人間が社会的状況の中で活動
 - 活動は状況により影響を受け、状況に影響を及ぼす
 - 活動の本人もそれを観察する人も何らかの意味づけを見出す。
- 人間活動システムの創発性を「ホロン (Holon)」(Checkland and Scholes (1990:22-23)) と呼ぶ
- 狭義の社会システム

社会システムは人間 (じんかん) = Holon のシステム

15

背景: コモンズ論と再生資源プール (CPR)

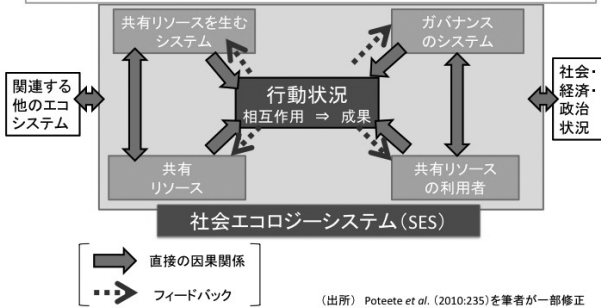


18

コモンズ論 :社会エコロジーシステム

Ostromのコモンズ論 (Ostrom (1990))

日本の山林入会地 (Hirano, Nagaïke, and Yamanoka Villages) や
スイスの牧草共有地 (Törbel) などの実証事例研究



19

新たな方法論の必要性

AS-ISとTO-BE: Enterprise Architecture (EA)などで用いられる、現状と理想の対比法
(The Chief Information Officers Council (1999:14), ITアソシエイト協議会 (2003: 第1部2))

これまでの地域活性化 (AS-IS)

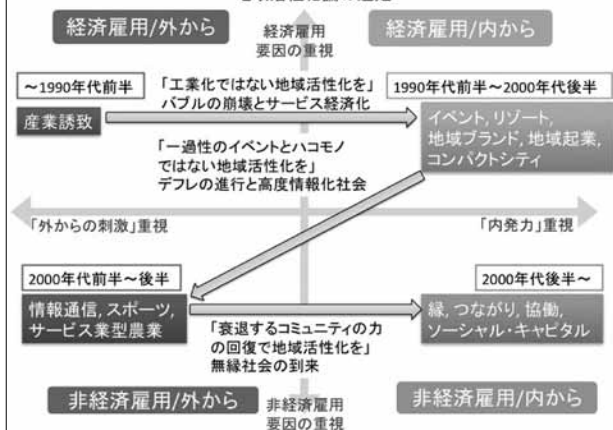
- ・「勘・経験・度胸」だけが頼りの政策
- ・声の大きいリーダーが仕切る事業
- ・「人を呼び込むイベントありき」の振興
- ・「ハコモノ」中心
- ・国頼みの事業計画
- ・事後の定量検証なし

望ましい地域活性化政策 (TO-BE)

- ・コミュニティの社会システムに注目した活性化
- ・地域の声を見える化、定量化
- ・立てた政策を住民の声で検証
- ・さらに政策効果を定量評価
- ・持続可能な事業計画
- ・他の地域に援用できる汎用性

22

地域活性化論の迷走

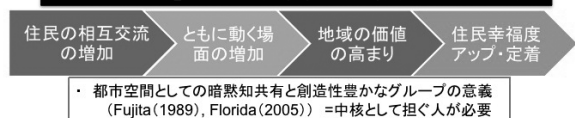


20

活性化:「社会関係資本」蓄積

- ・システムズ・アプローチによる「社会関係資本」の復活・増強
 - －コミュニティの「社会関係資本」(Putnam (2000))の復活・増強
 - －コミュニティは内在的な力の維持・復活ができ、その政策支援は可能
 - ・ 延藤安弘, 宮西悠司 (1981: 137-195), Gratz (1989: 147-174), 延藤安弘 (2001: 223-234)
 - －参加型システム分析: 復活の方策はコミュニティの住民自身が決める
 - ・ コモンズのself-governance ruleの設定方法 (Ostrom (1990))

「つながる力」での地域活性化の典型的4ステップ



23

メタレベルの地域活性化 方法論の必要性

- ・地域活性化の定義のあいまいさ
- ・多岐にわたる地域活性化の提言の歴史的推移
- ・コミュニティベースの社会システムの活性化に焦点

メタレベルでの「まちなか」活性化方法論の必要性

「都市コミュニティ」の力の回復策としてのまちなか活性化

+

まちなかのstakeholdersの声
(Voice of Customers)を聞く方法論

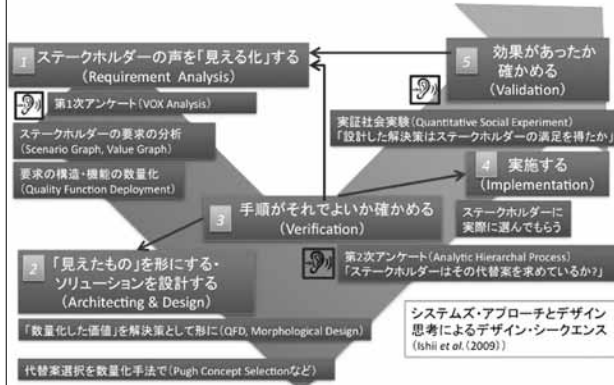
21

「よそもの、わかもの、ばかもの」 が役に立つわけ

- ・社会関係資本 (Putnam (2000))
 - －「結束型」: 地縁、血縁、エスニックグループなど
 - ・ 内向きの結束を固める効果
 - －「橋渡し型」: 社会的な亀裂をつなぐボランティアなど
 - ・ 外向きに多様なひとたちをつなぐ効果
- ・コミュニティの「協創力」が壊れても復元は可能
 - －弱まる「結束型」社会資本から、「橋渡し型」への移行
 - －「橋渡し型」は外部との連携や情報の伝播に優れる
- ・活性化の主役: 「よそもの、わかもの、ばかもの」とよくいわれる
 - －「よそもの」: 古くからいる人が見えない価値発見に優れる
 - －「わかもの」: 新しい価値の伝達や情報処理に優れる
 - －「ばかもの」: しがらみにとらわれず、「もやい直し」に優れる

24

シーケンシャル V モデル



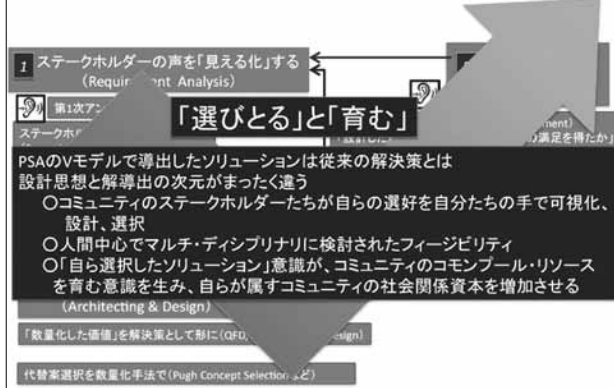
25

秋田のまちなか活性化策のデザイン



28

デザイン手法の創発性



26

フォーカスグループによるブレインストーミング

1 ステークホルダーの声を「見える化」する (Requirement Analysis)
(出所) 津々木晶子, 保井俊之, 白坂成功, 神武直彦 (2011)

実施日時 2011年3月16日 (水)
18:30-19:40

実施場所 秋田市民俗芸能伝承館4階会議室 (秋田市中心市街地活性化基本計画)

対象者 21名
秋田市中心市街地活性化協議会・通町商店街振興組合 (15名)
秋田市役所 (4名)
秋田スポーツ関係者 (2名)

内容 地域活性化 (まちなか活性化: 秋田) のために大事なことについて、ブレインストーミングを行い、KJ法を用いてグルーピングした。

フォーカスグループ会合, ブレインストーミング, KJ法 (親和図):
要求事項収集と特定を行うためのグループ発想技法
(Project Management Institute (2008: 107-108))

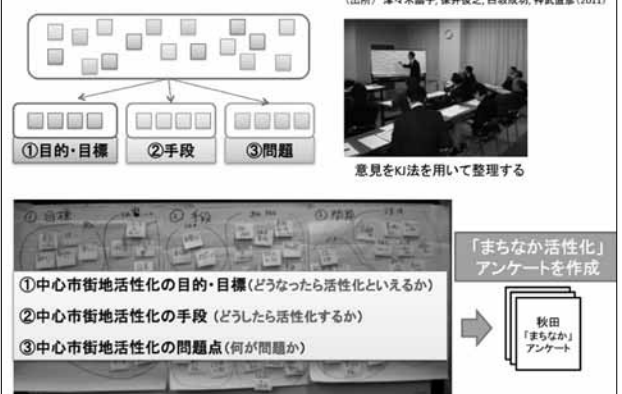
29

慶應SDMの地域活性化プロジェクト事例①: 秋田



(写真出所) 筆者撮影 (2011年3月～5月)

KJ法によるまとめ



30

ステークホルダーの声を「見える化」する
(Requirement Analysis)

(出所) 津々木晶子, 保井俊之, 白坂成功, 神武直彦(2011)

アンケート調査を顧客に近い環境で実施することによる顧客ニーズ理解の向上(石井浩介・飯野謙次(2008: 38))

実施日時 2011年3月27日(日)～28日(月)

実施場所 ①秋田市通町・大町商店街、②フォンテAKITA

実施方法 ①秋田市民に直接、協力依頼を行い、対面方式で実施
②東北地方太平洋沖地震チャリティイベント※に参加し直接配布

有効回答数 91(回収率76%)

質問項目

- 1) 個人属性 3項目
2) 主観的幸福度 1項目
3) まちなか活性化の必要性 1項目 } 「とても○○」～「まったく○○ない」
の4段階
4) まちなか活性化を実現するために必要な 12項目
5) まちなか活性化を実現するために大切な時期 9項目 } 「最も大切」9点
「とても大切」16点
6) まちなか活性化に大切な場所 7項目 } 「まあ大切」3点
「3段階で得点化」
7) まちなか活性化に大切なもの/事 17項目
8) まちなか活性化に大切な状態/状況 20項目
9) その他、自由記述 3項目

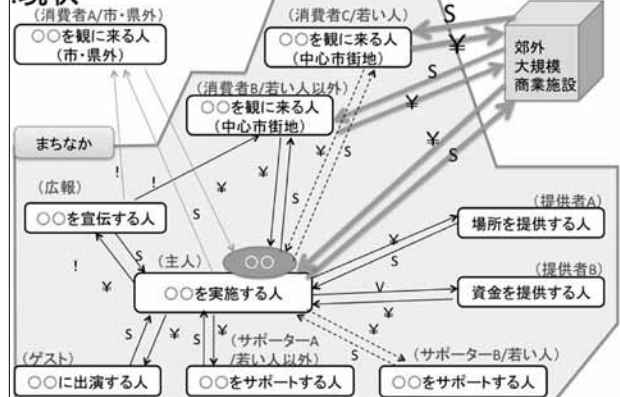
※「Sustainability for the Next Generation」(SING) (<http://www.singjapan.com/>)が3/27日に中心市街地内にある商業集積ビル「フォンテAKITA」階「まちの駅」で行った「東北地方太平洋沖地震チャリティイベント-bokuthink このまちの将来像を、創造し、拳闘する」に主催者の許可を得て飛び入り参加し、アンケートの趣旨などを説明、用紙を配布して記入招請

31

ステーキホルダーの声を「見える化」する
(Requirement Analysis)

1. 2010年10月1日起, 凡在中华人民共和国境内销售货物或者提供加工、修理修配劳务以及进口货物的单位和个人, 均应按照《中华人民共和国增值税暂行条例》及实施细则有关规定缴纳增值税。

現狀

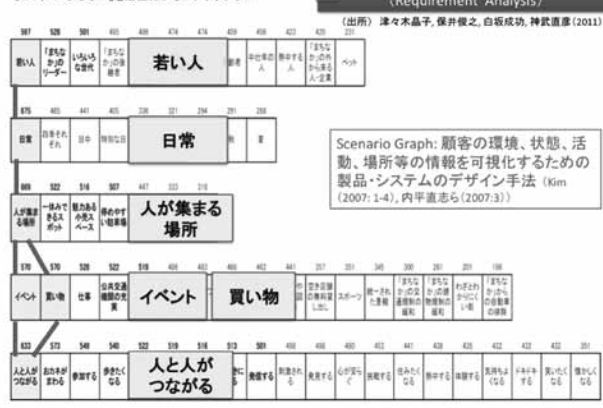


34

1 ステークホルダーの声を「見える化」する (Requirement Analysis)

〔出所〕 津々木晶子, 保井俊之, 白坂成功, 神武直彦(2011)

秋田市の「まちなか」を活性化するシナリオグラフ

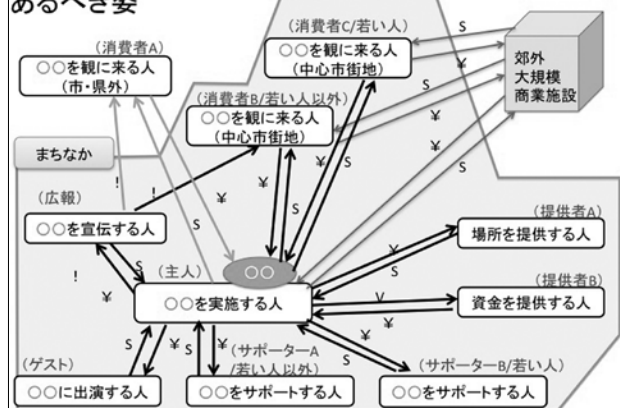


32

出所：津々本晶子、保井俊之、白坂成功、神宮直彦（2013）

5

次ぎに



35

1 ステークホルダーの声を「見える化」する
(Requirement Analysis)

(出所) 津々木昌子 堀井俊之 白坂信功 神宮清彦(2011)

3. 分析

- ・システムの境界を決める
- ・ステークホルダーの特定

2.3 まちなか活性化のためのレバレッジポイント

C²VCA* : Community-Based Customer Value Chain Analysis

Customer Value Chain Analysis (CVCA): ステークホルダー間の情報や金銭を媒介とする
つながりを「見える化」する手法 (石井浩介・飯野謙次 (2008, 20-25))
本研究は、地域活性化にはステークホルダーの地理状況が大きな規定要因のなると前提し、CVCAを地理情報を入れて拡張したC²VCAを使用

33

1 ステークホルダーの声を「見える化」する
(Requirement Analysis)
(出所) 津々木晶子、保井徹之、白坂成功、神武直彦(2011)

© 2006 The Authors
Journal compilation © 2006 Blackwell Publishing Ltd

シナリオグラフから得られる理想のシナリオ

- ・ 若い人が日常的に、人が集まる場所で、イベントや買い物をするこ
によって、人と人がつながり、秋田市の「まちなか」が活性化する。

C²VCAから考えられる問題

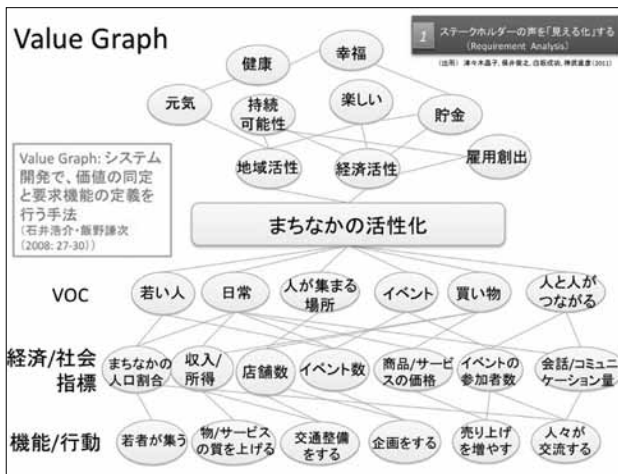
- ・ まちなかに、イベント、買い物機能がない。
- ・ 大型商業施設に、お金やサービスが流出している。
- ・ まちなかで、サービスやお金が完結していない。

C²VCA* : Community-Based Customer Value Chain Analysis

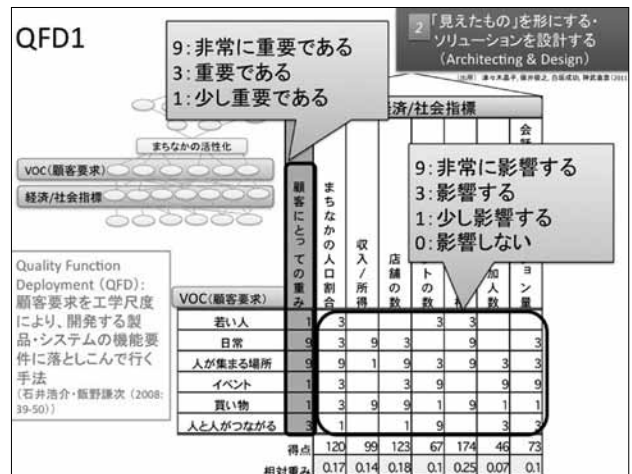
Customer Value Chain Analysis (CVCA): ステークホルダー間の情報や金銭を媒介とする
つながりを「見える化」する手法 (石井浩介・飯野謙次 (2008, 20-25))
本研究は、地域活性化にはステークホルダーの地理状況が大きな規定要因のなると前提し、CVCAを地理情報を入れて拡張したC²VCAを使用

33

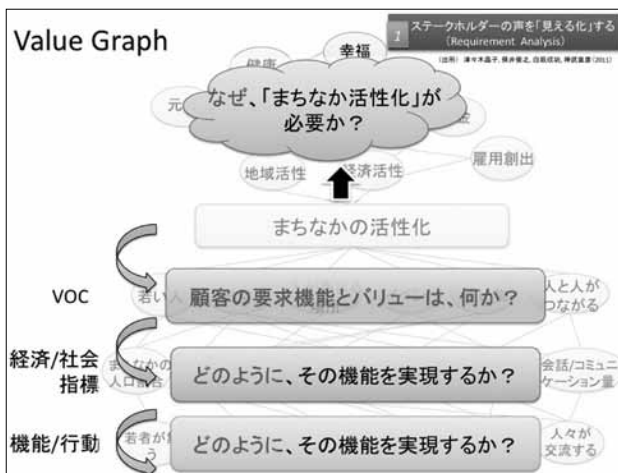
36



37



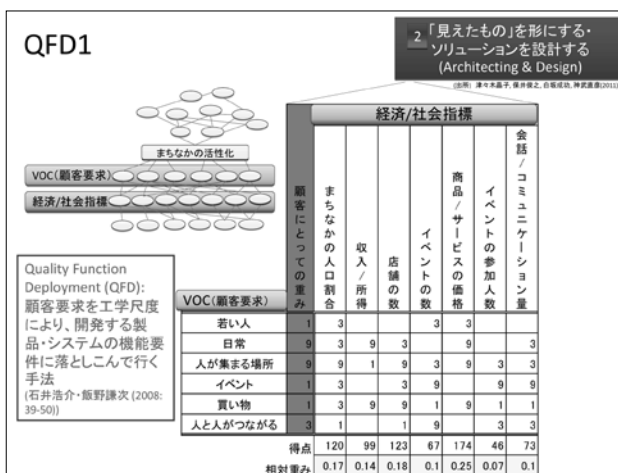
40



38



41



39

機能/行動の重み付け

2 「見えたもの」を形にする・ソリューションを設計する (Architecting & Design)

(出所) 津々木晶子、保井優之、白坂成功、神武直彦 (2011)

順位	機能/行動	割合
1	物/サービスの質を上げる	30%
2	企画をする	16%
2	売りを増やす	16%
4	若者が集う	15%
5	交通整備をする	14%
6	人々が交流する	10%

42

Morphological Analysis

Morphological Analysis: 機能を満たす形態を次々に展開することで開発要件の充足を構想 (Zwicky(1969))

2 「見えたもの」を形にする・ソリューションを設計する (Architecting & Design)

(出典) 渡々木高子, 藤井隆之, 白根成典, 神武康彦 (2011)

機能/行動	Solutionsの横展開の新たな組み合わせ
物/サービスの質を上げる	
企画をする	
売り上げを増やす	
若者が集う	
交通整備をする	
人々が交流する	

43

Prototyping Rapidly

(出典) 渡々木高子, 藤井隆之, 白根成典, 神武康彦 (2011)

2 「見えたもの」を形にする・ソリューションを設計する (Architecting & Design)

(例) Solution 1.の「エンターテインメント性の高い、多世代が盛り上がるプロスポーツをまちなかで楽しむ」を造形玩具で試作。

秋田駅 イベント会場

Prototyping: システム開発、プロジェクトマネジメントにおいて試作品を作ることでリスクの軽減を図る手法 (Project Management Institute (2008: 303-304))

46

Morphological Analysis

Morphological Analysis: 機能を満たす形態を次々に展開することで開発要件の充足を構想 (Zwicky(1969))

2 「見えたもの」を形にする・ソリューションを設計する (Architecting & Design)

(出典) 渡々木高子, 藤井隆之, 白根成典, 神武康彦 (2011)

機能/行動	Solutionsの横展開の新たな組み合わせ
物/サービスの質を上げる	
企画をする	
売り上げを増やす	
若者が集う	
交通整備をする	
人々が交流する	

44

Pugh Concept Selection

(出典) 渡々木高子, 藤井隆之, 白根成典, 神武康彦 (2011)

2 「見えたもの」を形にする・ソリューションを設計する (Architecting & Design)

Pugh Concept Selection: 定量化に必ずしもなじまない機能デザインの工学的比較方法 (Pugh (1991))

要求	Solution1	Solution2	Solution3	Solution4	Solution5	Solution6
若い人	++	+	D	+++	--	-
日常	+	++	A	+++	S	++
人が集まる場所	+++	++	T	++	++	S
イベント	S	-	U	-	S	-
買い物	-	++	M	--	+	---
人が人がつながる	S	-	M	++	-	+++
	5+2S1-	7+2-		10+3-	3+2S3-	5+1S5-
順位	3	2	4	1	4	4

1) 要求 (または重要な要素) を定義する。
2) 選択肢 (Solution) を定義する。
3) 基準値 (DATUM) を決め、その基準に比べ、他の Solution が、要求に対して、良いのか (+)、悪いのか (-)、同じ程度 (S) を入力する。

47

組み合わせた6 Solutions

2 「見えたもの」を形にする・ソリューションを設計する (Architecting & Design)

(出典) 渡々木高子, 藤井隆之, 白根成典, 神武康彦 (2011)

機能/行動	Solutionsの横展開の新たな組み合わせ
1. エンターテインメント性の高い、多世代が盛り上がるプロスポーツをまちなかで楽しむ。	2. まちなかに、アウトレットタウンを作り、買い物客が、世界中のブランド品を安く買う。
3. まちなかで、オタクの人をターゲットにした、日本一マニアックな物産展を開催する。	4. 若者が、思い思いに企して、気軽に使えるコミュニティスペースをまちなかに作る。
5. 観光客向けに、秋田の食材を生かした、食べ歩きイベントを開く。	6. 多世代、他業種のリーダーが、秋田のブランディングについて、地域大学で学ぶ。
人々が交流する	

45

Pugh Concept Selection

(出典) 渡々木高子, 藤井隆之, 白根成典, 神武康彦 (2011)

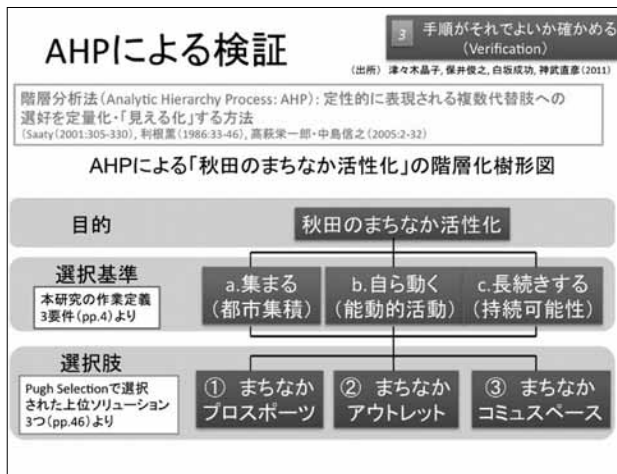
2 「見えたもの」を形にする・ソリューションを設計する (Architecting & Design)

Pugh Concept Selection: 定量化に必ずしもなじまない機能デザインの工学的比較方法 (Pugh (1991))

要求	Solution1	Solution2	Solution3	Solution4	Solution5	Solution6
若い人	++	+	D	+++	--	-
日常	+	++	A	+++	S	++
人が集まる場所	+++	++	T	++	++	S
イベント	S	-	U	-	S	-
買い物	-	++	M	--	+	---
人が人がつながる	S	-	M	++	-	+++
	5+2S1-	7+2-		10+3-	3+2S3-	5+1S5-
順位	3	2	4	1	4	4

1. エンターテインメント性の高い、多世代が盛り上がるプロスポーツをまちなかで楽しむ。
2. まちなかに、アウトレットタウンを作り、買い物客が、世界中のブランド品を安く買う。
4. 若者が、思い思いに企画して、気軽に使えるコミュニティスペースをまちなかに作る。

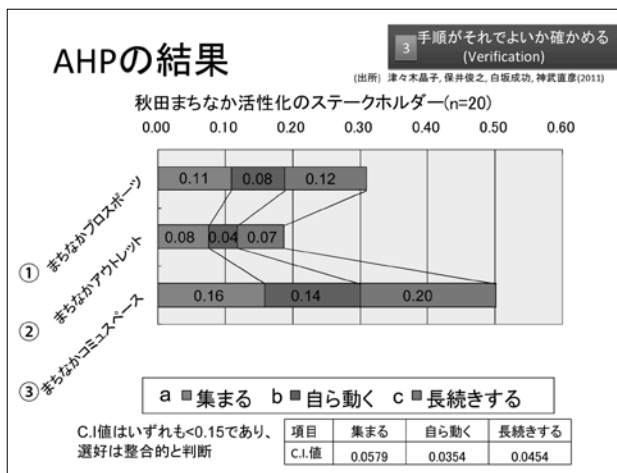
48



49



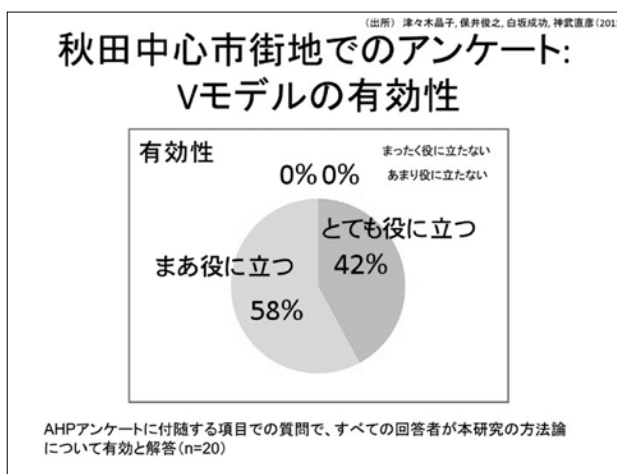
52



50



53



51



54

慶應SDMの地域活性化プロジェクト事例⑤: 石巻市

SDM研究所・榎井智明研究員らのプロジェクト



(図表出所) ISHINOMAKI2.0ウェブサイト
http://ishinomaki2.com/

ISHINOMAKI2.0 (http://ishinomaki2.com)との連携: 石巻の地元商店街の関係者の方々とワークショップの開催、全国の商店街との連携を通じて、被災商店街の復興支援

55

今後の課題

- SDM学体系の確立
- 文理統合: 学問領域の横断的つながり深化
- 地域の社会システムの多様な課題解決への適用と研究事例の蓄積
- 参加型システム分析の方法論: 国・地方自治体並びに企業関係者との共有・さらなる発展

慶應SDMの演習風景



(写真出所) 左: 筆者撮影, 中・右: 慶應SDM提供

58

慶應SDMの地域活性化プロジェクト事例⑥: 地域支援型農業研究

SDM研究所・村瀬昭博研究員らのプロジェクト

スイス・ドイツを参考に、米国で始められた、都市の消費者と農業関係者を人と人との絆でつなぐ、地域支援型農業(CSA)の日本における広がりや地域活性化へのインパクトを研究

慶應SDMアグリゼミは北海道の契約農園を訪問し、農都共生の現場を体験



(写真出所) 慶應SDMウェブサイト

56

参考文献①(英)

- Brown, J., Isaacs, D. (2005) *The World Café: Shaping Our Future Through Conversations That Matter*. Wiliston, VT: Berrett-Koehler. (邦訳: アニータ・ブラウン、デイビッド・アイザックス、ワールド・カフェ・コミュニティ著、香取一昭、川口大輔訳(2007)『ワールドカフェ: カフェ的会話が未来を創る』(ヒューマン・リビュー))
- Brown, T. (2009) *Change by Design: How Design Thinking Transforms Organizations and Inspires Innovation*. New York: Harper Business. (邦訳: ティム・ブラウン著、千葉誠生訳(2010)『デザイン思考が世界を変える: イノベーションを導く新しい考え方』早川書房)
- Checkland, P. and Scholes, J. (1990) *Soft Systems Methodology in Action*. Chichester, UK: John Wiley & Sons, Ltd. (邦訳: ビーター・チェックランド、ジム・スコールズ著、妹尾堅一郎監訳、木崎恭一、平野雅章、根来龍之訳(1994)『ソフトシステムズ方法論』有斐閣)
- Dvir, R., Schwartzberg, Y., Avni, H., Webb, C. and Lettice F. (2006) 'The Future Center as an Urban Innovation Engine', *Journal of Knowledge Management*, Vol.10 Number 5, November 2006.
- Florida, R. (2005) *Cities and the Creative Class*. London: Routledge. (邦訳: リチャード・フロリダ著、小長谷一之訳(2010)『クリエイティブ都市経済論: 地域活性化の条件』日本評論社)
- Fujita, M. (1989) *Urban Economic Theory: Land Use and City Size*. Cambridge: Cambridge University Press (邦訳: 藤田昌久著、小出博之訳(1991)『都市空間の経済学』東洋経済新報社)
- Gratz, R. (1989) *The Living City*. New York: Simon & Schuster (邦訳: ロバート・B・グラッツ著、富田朝彦、宮路真知子訳(1993)『都市再生』晶文社)
- Grundahl, J. (1995) 'The Danish Consensus Conference Model', Joss, S. & Durant, J. (1995) *Public Participation in Science: the Role of Consensus Conferences in Europe*. London: Science Museum
- Hardin, G. (1968) 'The Tragedy of the Commons', *Science* 162:1243-1248
- Ishii, K., de Wick, O., Haruyama, S., Maeno, T., Kim, S., Fowler, W. (2009) 'Active Learning Project Sequence: Capstone Experience for Multi-Disciplinary System Design and Management Education', *Proceedings, International Conference on Engineering Design, ICED'09, 24-27 August 2009, Stanford University, Stanford, CA, USA, 10-57 ~ 10-68*
- Jackson, S. (2010) *Architecting Resilient Systems: Accident Avoidance and Survival and Recovery from Disruptions*. New Jersey: A John Wiley and Sons, Inc., Publication

59

慶應SDMの地域活性化プロジェクト/研究はさらに各地で展開中



57

参考文献②(英)

- Kim, Sun K., Ishii, K. (2007) *Scenario Graph: Discovering New Business Opportunities and Failure Mode*. Technical paper, CA, USA: Stanford University, pp.1-8.
- New York Times (2011) 'In Japan, the Summer of Setsuden', Editorial Section, *New York Times*, September 25, 2011 (<http://www.nytimes.com/2011/09/26/opinion/in-japan-the-summer-of-setsuden.html>). (2011年10月6日アクセス)
- Nguyen, N.C., Bosch, O.J.H., Maani, K.E. (2011) 'Creating 'Learning Laboratories' for Sustainable Development in Biospheres: A Systems Thinking Approach', *Systems Research and Behavioral Science*, Syst. Res. 28, 51-62 (2011)
- Nonaka, I. and Konno, N. (1998) 'The Concept of "Ba": Building a Foundation for Knowledge Creation', *California Management Review*, Vol.40, No.3, Spring 1998
- Ostrom, E. (1990) *Governing the Commons: The Evolution of Institutions for Collective Action*. Cambridge: Cambridge University Press
- Poteete, A., Janssen, M., Ostrom, E. (2010) *Working Together: Collective Actions, The Commons, and Multiple Methods in Practice*. Princeton University Press
- Pugh, S. (1991) *Total Design: Integrated Methods for Successful Product Engineering*. Reading Massachusetts: Addison-Wesley Publication
- Putnam, R. (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. New York: Simon & Schuster (邦訳: ロバート・パットナム著、桑内康次訳(2006)『孤独なボウリング』柏書房)
- Saaty, T. (2001) *The Analytic Network Process: Decision Making with Dependence and Feedback*, Second Edition, Pittsburgh, PA: RWS Publications.
- Shimizu, M. and Clark, A. (2011) 'Resilience must be key part of policy approach to disaster response', *The Nikkei Weekly (Japan)*, Monday, August 22, 2011
- Smith, C., Felderhof, L., Bosch, O.J.H. (2007) *Adaptive Management: Making it Happen Through Participatory Systems Analysis*, *Systems Research and Behavioral Science*, Syst. Res. 24, 567-587 (2007)
- The Chief Information Officers Council (1999) *Federal Enterprise Architecture Framework, Version 1.1* September 1999 (<http://www.cio.gov/documents/fedarch1.pdf>) (2011年5月17日アクセス)
- Zwicky, F. (1969) *Discovery, Invention, Research through the Morphological Approach*. New York: McMillan.

60

参考文献③(邦)

- ・ ITアソシエイト評議会(2005)『業務・システム最適化計画について(Ver1.1): Enterprise Architecture策定ガイドライン』平成15年12月 (http://www.meti.go.jp/policy/it_policy/ea/data/report/r2/index.html) (20115月17日アクセス)
- ・ 石井浩介, 飯野謙次(2008)『価値づくり設計』 実賢堂
- ・ 内平直志, 京屋祐二, Sun K. Kim, 前田勝宏, 小沢正則, 石井浩介(2007)『製造業のサービスの分類法と事例による企画設計支援』 Proceedings, The 21st Annual Conference of the Japanese Society for Artificial Intelligence, 2007, 181-03, pp.1-4
- ・ 延森安弘, 宮西悠司(1981)『内発的まちづくりによる地域再生過程: 神戸市真野地区のケーススタディ』 吉岡健次, 崎山耕作編『大都市の衰退と再生』 東京大学出版会
- ・ 延森安弘(2001)『「まち育て」を育む』 東京大学出版会
- ・ 岡本美紀, 鈴木重夫, 津々木晶子, 保井俊之(2011)『価値協創型システムの構造分析: 造園地における要素間価値協創過程の数量分析を事例として』 社会経済・システム学会第30回大会発表スライド, 2011年9月
- ・ 重廣出, 保井俊之, 金子得史, PHP総研グローバルリスク分析プロジェクト「(2012年度) PHPグローバルリスク分析:『主要国における指導者交代と政権選択選挙』と『歴史的パワー・シフト』の交差」 PHP研究所ウェブサイト (http://research.php.co.jp/research/foreign-policy/PHP_GlobalRisks.php)
- ・ 鈴木重夫, 堀田佳江, 林美香子, 白坂成功(2011)『商店街活性化における市民参加型価値づくり: 商店主・顧客の非経済的インタラクションの数量分析』 社会経済・システム学会第30回大会発表スライド, 2011年9月
- ・ 高萩栄一郎・中島信之(2005)『Excelで学ぶAHP入門: 問題解決のための階層分析法』 オーム社
- ・ 津々木晶子, 保井俊之, 白坂成功, 神武直憲『システムズ・アプローチによる住民嗜好の数量化・見える化: 中心市街地の新しい政策創出の方法論』『関東都市学会年報』第13号, pp.110-116
- ・ 東京大学 i.school編(2010)『東大式 世界を変えるイノベーションのつくりかた』 早川書房
- ・ 刀根重(1986)『ゲーム感覚意思決定法: AHP入門』 日科技連
- ・ 永田和宏(2008)『タンバク質の一生』岩波新書 新赤版1139
- ・ Project Management Institute(2008)『プロジェクトマネジメント知識体系ガイド 第4版』 Project Management Institute
- ・ 前野隆司(2011)『全体統合視点の必要性とフューチャーセンターの可能性: 社会課題・市民課題解決のためのフューチャーセンターのデザイン』ふくしま未来ミーティング(2011年12月11日)より(写真: 鹿嶋SOM提供)

61



62

専門の壁を越える取り組みから

発表：和気洋子（商学部教授）

慶應義塾大学教養研究センター主催
第三回 社会・地域連携セミナー
大学教育と社会地域連携のありかたを考える

専門の壁を越える取り組みから

2012年1月26日（木）
慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎
商学部 和気洋子

1

慶應プロジェクトの目的

中国環境研究

国際システム研究

- 東アジア経済の地域連携を強めながら、持続的発展のための効果的かつ効率的な国際協調の枠組みを模索する総合的なアプローチ
- 東アジアにおける地球温暖化問題への対応のひとつとして植林プロジェクトなどのCDM（クリーン開発メカニズム）事業化を目指した国際制度設計の枠組構築

4

フィールドワーク型共同研究の事例 ＜慶應の中国環境プロジェクト＞

- 1) 組織上のプラットフォーム：慶應義塾大学産業研究所（三田）
- 2) 共同研究プロジェクトの期間：1985年～現在
- 3) 研究の共通テーマ：環境と経済の研究
- 4) 参加者：塾内・塾外の研究者・大学院生・学部生
- 5) フィールドワークの対象地域：中国の成都、瀋陽市など
- 6) 専門領域：大気・土壌・地質学、公衆衛生・医学、農学、地理情報、産業連関分析、環境・経済政策、政治体制

2

慶應プロジェクトの特徴

統合性

中国を含むアジア環境研究の科学的知見と経験的手法を、国際システム形成をめぐる国際交渉にむけた直接・間接的な政策論議に有機的に活かし、より統合的検討のもとでより現実的な政策提言を行う

先発性

中国環境研究について、実際に現地での実態調査を測定網の設置や日中環境分析用産業連関表の作成は本研究グループが最初であり、戦略的情報発信（特に政策課題の発信）という社会貢献の側面で「先発性」が期待できる

5

慶應プロジェクトの歩み

1985年～	東アジア大気汚染観測ネットワークのプロジェクト
1997～2001年	「未来開拓学術推進事業」による研究プロジェクト
2002～2003年	大型研究助成プロジェクトとして「中国の環境保全と地球温暖化防止のための国際システム構築に関する研究」を推進
2004年～現在	21世紀COE、「日本・アジアにおける総合政策学先導拠点」において日中環境政策協調の実証実験としてCDM事業化の実証実験を継続
2009年～	未来先導基金プロジェクト「瀋陽市東北大学と慶應義塾学部横断学生交流」

3

慶應プロジェクトの特徴

地域性

グローバル化社会の中、その国・地域の持続的発展の視点で、地域的特性を丹念に分析し、研究を推進することで、中国ひいては東アジア地域の同様な問題について「地域性」アプローチが活かされる

実学性

中国に代表される途上国の経済発展という動学的経路上で実効ある地球温暖化防止策とアジア地域における国際環境協力を模索するための政策提言型研究プロジェクトとしての戦略的な特徴

6

“綠色百里の長城”



7

中国康平県カルチン沙漠



10

未来先導基金 瀋陽市 学生交流風景
(2010年)



8

植林風景



11

CDM事業化プロジェクトの概要

農水省プレスリリース 2009年12月22日から

慶應義塾大学からクリーン開発メカニズム(CDM)事業について、日本政府の承認申請があり、京都メカニズム推進・活用会議における審査の結果、事業承認指針に基づき承認されましたのでお知らせします。

1. 背景

クリーン開発メカニズム(CDM)事業とは、京都議定書に基づき先進国と途上国が共同で排出削減事業を実施し、その削減分を投資国(先進国)が自国の目標達成に利用できる制度で、慶應義塾大学が中国で実施する同事業について承認を行ったところです。

2. 申請者

慶應義塾大学

9

記念植樹



12

CDM事業化プロジェクトの概要

農水省プレスリリース 2009年12月22日から

3. プロジェクトの要旨

実施国:	中国
プロジェクト名:	中国遼寧省康平県砂漠化防止小規模再植林プロジェクト
取組内容:	砂漠化の危機に直面している地域への植林(再植林活動)
面積:	約371ha
クレジット獲得期間:	2003年1月1日～2022年12月31日(20年間)
CO ₂ 吸収量予測:	20年間の合計で23,055 ton-CO ₂ e

13

2009年12月23日 日本経済新聞朝刊 34ページ

慶大の中国植林 「クリーン開発」 日中政府が承認

慶應義塾大学は22日、中国・瀋陽市で実施している植林事業が「クリーン開発メカニズム(CDM)」を利用した温暖化ガス削減事業として日中両政府に承認されたと発表した。2003年1月1日と22年12月31日の期間について、植林による二酸化炭素(CO₂)削減分の一部を日本の排出枠とみなせるようになる。

CDM事業は温暖化ガスを削減の国際枠組みである京都議定書で導入された。これまで企業が主体で進めており大学による実施例は初めてという。正式な承認には日中両政府に続いて国連による審査を通る必要がある。

16

クリーン開発メカニズム事業に係る政府承認書

平成 21 年 12 月 4 日
第 1 号 第 1 6 7 号

クリーン開発メカニズム事業及び事業への参加に関する政府承認書について

信用：〒106-8543
東京都港区三軒茶屋1-15-43
名称：慶應義塾大学
代表者の氏名：氏名：部長 渡部 隆

上記の書から申請のあった事業「中国遼寧省康平県砂漠化防止小規模再植林プロジェクト」について、気候変動に関する国際条約締結国の気候変動条約 12 条 3(a)及び9に基づき、事業及び事業への自発的な参加も承認する。

承認の年月日 平成 21 年 12 月 4 日

日本国政府

上記プロジェクトについて支援を提供する。

農林水産大臣 赤松 広隆

【備考1】日本国は、平成 14 年 6 月 4 日に気候変動条約を批准している。
【備考2】日本国において、クリーン開発メカニズムによる削減活動としての事業及び国際条約締結国の事業への参加活動の承認については、気候変動条約締結国の「承認メカニズム」による承認、がなされている。

14

参考資料

◎ 慶應義塾産業研究所ホームページ

http://www.sanken.keio.ac.jp/index_j.html

◎ 『地球温暖化と東アジアの国際協調－CDM事業化に向けた実証研究』 共著：和気 洋子・早見 均、慶應義塾大学産業研究所叢書、慶應義塾大学出版会 (2004年9月)

◎ 特集：義塾の中国環境プロジェクト座談会「パンダプロジェクトからCDMまで」、所載『三田評論』2004年11月

17

国家发展和改革委员会文件

发改气环[2009]493号

国家发展改革委关于同意中国辽宁康平防治荒漠化小規模造林项目作为清洁发展机制项目的批复

康平县农业局(康平县农业局)：

你公司提交的《辽宁省康平县防治荒漠化小規模造林项目(项目书)》、《辽宁省康平县防治荒漠化小規模造林项目》的申请材料，经《清洁发展机制项目运行管理办法》的有关规定，经国家发展和改革委员会审核后，现批复如下：

一、该项目符合《清洁发展机制项目运行管理办法》规定的条件，符合我国实施的清洁发展机制项目目标，同意作为清洁发展机制项目。

二、你公司应严格按照《清洁发展机制项目运行管理办法》、《清洁发展机制项目运行管理办法》的有关规定，做好项目的实施工作。

注：项目总投资不超过3000万元人民币，项目总投资不超过3000万元人民币。

四、你公司应根据国家发展改革委对项目设计文件进行进一步的修订与完善，以利于项目的顺利实施。

附：项目建议书(英文)



主編：清潔發展 項目 批准

抄送：外交部、科技部、財政部、環境保護部、農業部、中國氣象局、遼寧省農業局

— 1 —

— 2 —

15

ビジョン発信型教育プログラムの実験 ＜福澤諭吉記念文明塾の創設＞

1) 「文明塾」は慶應創立150年プロジェクトの一環として創設

2) 当初は、新・福澤塾(仮称)として、

■ 先導的テーマの研究機能や政策提言等のシンクタンク機能や国際シンポジウム等の開催機能も担う「研究拠点」

■ 全人教育を実践し独立自尊の精神を備えた国際的なリーダーを育成する「教育拠点」などの活動を開始

18

シンポジウム;地球環境 夢プロジェクト
(2008年5月11日三田キャンパス 西ホール)



19

文明塾教育プログラム第一期スタート
2009年4月

- 1) 福澤文明塾の3つの理念
- 2) 福澤文明塾の目的
- 3) 場作りのためのルール
- 4) 福澤文明塾とは



22

シンポジウム;地球環境 夢プロジェクト
(2008年5月11日三田キャンパス 西ホール)



20

福澤文明塾の3つの理念 ①

●私塾の原点に還る

今から150年前の時代の大きな転換期に創設された、慶應義塾の原点に立ち返ります。

古いしきたりや慣習にとらわれず、学ぶ意欲と社会に貢献する意志のある人たちが集い、知性と人間性を磨きあうための場を提供することで、高い志を持った人材が社会の先導者へと成長することを支援します。



23

シンポジウム;地球環境 夢プロジェクト
(2008年5月11日三田キャンパス 西ホール)



21

福澤文明塾の3つの理念 ②

●半学半教

学生と他大学の学生、社会人がお互いに学びあい、教えあう、慶應義塾の原点にあった「半学半教」の場を創ります。また、講師のレクチャーを一方向的に聴講するだけでなく、講師との対話や塾生同士の討論の時間を豊富に確保します。

多様な価値観を持った、塾生がお互いに刺激し合う参加型・体験型の学習機会を通じて、次世代のリーダーに求められる論理的思考力や、プレゼンテーションスキルの向上を促します。

24

福澤文明塾の3つの理念 ③

●社中協力

学んだ成果をもって未来貢献を果たすというプロセスの確立を目指します。高い能力と志をもった塾生たちが、多大な経済的負担なく、自らの可能性を最大限に発揮できる環境を整備するためにも、慶應義塾創立150年記念事業として義塾内外から広く支援を受けながら運営していく塾を目指します。

■ 福澤諭吉記念文明塾運営基金(2009年1月)

- 塾内外から広く支援を受けながら塾を運営し、高い能力と志を持った人たちが、多大な経済的負担を負うことなく、自らの可能性を最大限に発揮できる環境を整備する。
 - 基金の運用果実をもってプログラムの開発・運営を行う。
 - 寄付金を基金に随時組み入れ、基金の充実を図る。
 - 塾生自身も塾を支えていく。

25

25



28

コカコーラ財団支援による環境教育プログラムの導入(2010年9月)

【プログラムスキームと期待される成果】



26

マインドマッピングの様子

・発表時間は1グループ3分



29

北海道栗山町雨煙別小学校跡 コカ・コーラ環境ハウスでのワークショップ



27

高知県梼原町庁舎屋上のPV視察



30



31



34



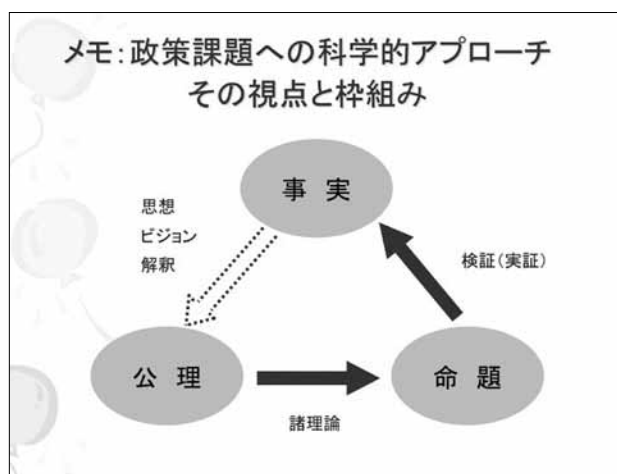
32



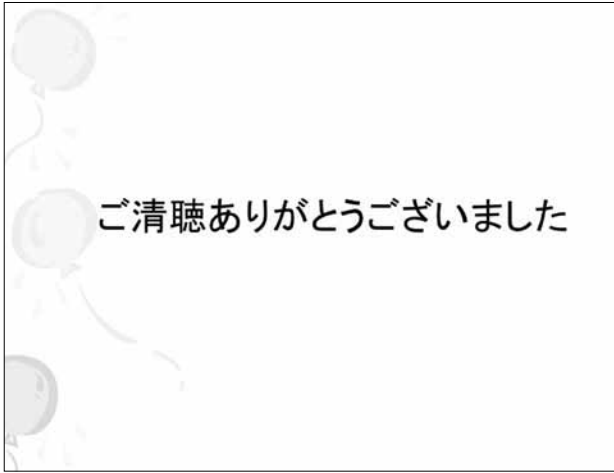
35



33



36



37

ディスカッション

種村 それでは、コメンテーターとしてお越し頂いた総合政策学部の飯盛義徳先生、経済学部羽田功先生、商学部の牛島利明先生の3名の先生にコメントをいただきたいと思います。ただ今保井先生、和気先生にお話しいただいた内容についてはもちろん、教養研究センターの社会、地域連携のあり方、あるいは慶應義塾としてのあるべき姿勢なども視野に入れた形でも構わないと思います。

飯盛 保井先生と和気先生、貴重なお話、ありがとうございました。私は前回、「SFC（湘南藤沢キャンパス）の取り組み」というテーマで、金子郁容先生と一緒に発表させていただきました。その際には非常に盛り上がり、ぜひ教養研究センターの先生方と何か一緒にできればと、SFC内でも話し合っ、本気で推進をしようとしております。そのご縁もあり、また今日は朝からずっと大学院の卒業修士論文の指導を日吉でしていたところ、第3回セミナーを行うとお聞きして、こうして参加いたしました。ぜひ、今後ともいろいろと交流をお願いできればと思っております。

今、お二人の先生のお話をお伺いして、そこにはたくさんの気付きがあり、参加をさせていただいて本当によかったと思っております。このようなテーマをお考えになっている先生方との思いが同じところにあり、それを共有できること、そしてまた少し違うところもあるのが、微妙なバランスで最高だと思いました。ネットワーク論では、自立するために協調が必要で、協調するためには自立が必要なんてことを言いますが、私たちもそういうことができるんじゃないかなと感じました。

まず保井先生の地域活性化とシステムズアプローチにつきまして、本当に私は目からうろこが落ちる思いでした。地域活性化を教育、研究している人間からしても、このシステムズアプローチというものがすごく有効だというのは前々から感じてはいたんですけど、実は私、博士の副専攻がシステムズアプローチでして、それをすっかり忘れてしまっている自分がいまして、今日のお話でこれはいかんと気づかされました。

やはり保井先生がおっしゃる通りで、地域活性化の成果とか評価は、その定義がすごくあいまいな中

で、重要であるという認識はますます高まっているように感じます。そして、私はこれをどのようにきちんとした成果を見せていながら進めていくのかというところが、大学に与えられた役割だというふうに思っております。今回、保井先生はそこを非常にシステムチックに展開をされているというところで大変感銘を受けました。

先生はシステムズアプローチや、「場のデザイン」というお話をされていましたが、実はSFCでは「プラットフォーム」という概念で説明をしております、つい先日、年末に『創発経営のプラットフォーム』（2011年、日本経済新聞出版社）という本を、國領学部長を中心に出版しました。その中で、私は「地域活性化とプラットフォーム」に関する章を担当しております。そのコンセプトと今日の保井先生のお話というのは、完全に一致する部分があります。プラットフォームという概念では、設計するという視点がキーポイントで、そのためには、システムダイナミクス的な手法で見える化していくということが大事だと思っております。

私はそういうことができる人を「プラットフォームアーキテクト」と呼んでいます。つまり、「創発をもたらし場づくりができる人」ということですが、そういう人をいかに育成していくのかの問題提起まではしています。けれども、では具体的にどうアプローチをするのかについてはこれからの課題であると、いろいろな論文や本に書き続けて、そこから全然進んでないという現状です。今日の保井先生のお話を伺っていて、これは何か大変貴重な授業をお伺いしたんじゃないかと思うぐらい、ヒントがたくさんありました。

私はどちらかというとオープンに会話をするワールドカフェ方式を取り入れています。また、ケースメソッドも多く使っております。しかし、その全体場づくりをできる、そこに木も見て、森も見人る人をどうやってつくっていくのかというところには、まだまだこれから研究をしていかないといけないところでしたので、今日はたくさんのヒントをいただきました。

また保井先生は最後のところで、いろいろな事例をつなげていき、これから精緻化をしていきたいとおっしゃっていましたけれども、ぜひ、私どもの事例はまだ

まだ小さいですけども、こうして慶應でもいろいろな教員がいろいろなところで、いろいろなことを行っていますので、何か一緒にコラボレーションでできればいいなと感じました。

また和気先生のお話はもう本当に長年の素晴らしいご活動で、スライドにお写真が出てきた小島学部長は私が慶應義塾に入ったときの学部長でおられまして、非常に懐かしかったです。和気先生のお話の中で試行錯誤をしながらという言葉がありました。植林をしながら試行錯誤しながらやっていって、そこで何回か中断の危機があったけれども試行錯誤しながら続いている。この試行錯誤自体が実は若手の先生方や院生たちの教育の場になっているんじゃないかということで、やはり続けられるようになったというお話がありました。実は、これは私も前回のセミナーで報告させていただいたんですけども、まったくその通りの状況がありました。私自身、試行錯誤というものを研究、教育に取り込んでいくことがいかに重要かということを、いつも感じておりましたので、まさに我が意を得たりと感じました。

私の卒業生も文明塾に参加をしておりますし、また1期生の方が文明塾が終わった後に立ち上げられたプロジェクトのアドバイザーを私がやらせていただいております。「藤沢検定」というプロジェクトは、地域活性化のための地域をよく知るための仕組みということで立ち上がりまして、非常に懐かしく思っております。

文明塾の方々というのは本当に熱心で、仕事をお持ちの方ばかりなのですが、仕事は大丈夫かというぐらい熱心にいろいろ取り組んでらっしゃったので、どういうことをやってらっしゃるのかなというふうに不思議に思っていました。ですが今日、立ち上げのころから活躍されている和気先生のお話をお伺いして、これが慶應義塾の舎中の学びの非常に大きな拠点になっているのだと感じました。

たとえば私もいろいろな地域にお伺いすると、地域の三田会の方々からよく声を掛けていただきます。どうしてももう1回勉強したいという方が多いんですね。そういう地域のリカレント教育の場になっているということも素晴らしいなと思っております。もちろん、これをするには先生方のご負担が大変かもしれませんし、予算



飯盛 義徳氏

もあるでしょうけれども、いろいろなところでニーズは多くあると感じますので、東京だけではなく、もっと拡大し、いろいろなところで行うことができれば、いろいろな地域の三田会の方々が喜ばれるんじゃないかなという気がします。

それから最後に先生がおっしゃった、公理があって、それから命題が生まれて、事実というものを、もっともっと見つめ直すことで、またその公理につながっていくような道があり得るんじゃないかというお話でしたけれども、これも私、非常に素晴らしいなと思っているのは、やっぱり混迷のこの社会を何か切り開いていくための、そういう新しい物の見方や公理みたいなものを、大学の役割の1つとしてつくり上げていくというフェーズがどこかで必要で、それがやはり慶應義塾のような実学の中から、フィールドをくまなく見詰めていくという姿勢の中から、私は生まれてくるものじゃないかというように思っております。

この間も授業の最後に学生たちと話したことがあります。たとえばいろいろな地域の中に入り込んで、ある人は円と言うかもしれないし、でもある人は正方形でしたと言うかもしれない。それを「全然、違う」というふうに片付けていいのかという話をしました。たとえば実際はそれは円柱だったかもしれないわけです。ですから、本質を見極めるためにどうすべきかをしっかり考えようということ、来年度のプロジェクトにしようとしています。

インタビューをしたりアンケートをするということは、もちろん絶対大事でやらないといけません。先日、博士の学生が私のNPOを題材として研究をするということでインタビューを受けました。初めて研究者じゃなくて、被験者の立場でインタビューを受けたときに、いろいろ答えていくうちにびっくりするぐらいの発見がありました。ああ、なるほど何気なくやっていたけど、こんな意味があったんだとかということにいっぱい気が付いたんですね。

おそらく地域の方々にいろいろインタビューすると、シャイな方もたくさんいらっしゃるかと、保井先生のお話の中でも出てきたように1升ぐらい飲まないで本音が出ない感じの方がいたり、九州人はもしかして2升かなと思ったんですけども、私もこの間、2次会、3次会を本音で語らせていただきました（笑）。

たぶんこうだとインタビューでおっしゃったこと、それを質的研究によっておっしゃったことをきちんと実証するための道具立てというのは、グラウンデッド・セオリーとかいろいろなものがあると思います。けれども、それが本当なのか、本質なのかということも踏み込んで考えていくと、その本人も気が付いていないような内面の、もっと奥底にある本質みたいなものがあるかもしれない、それは観察者にしか分からないこともあると思うんです。

こういったことを上手にやっていくためには、いろいろな先生方や学生たちとのコラボレーションによる多角的な視点、それはたとえば経済学から見たらこうとか、社会学から見たらこうですとか、いや情報社会学から見たらこうですという、そういう何かいろいろな視点から見つめ直すことによって本質にアプローチができるんじゃないかなと、そういうものがたぶん公理というものにつながってくるんじゃないかという気がしています。そういう意味ではやはりいろいろなディシプリンの先生方で、いろいろな取り組みをなさっている方々、でも同じように地域連携をやられている先生方との意見交換がこれから非常に重要です。これからそれを更に昇華をして、慶應義塾としてきちんと発信できる公理と呼べるものだったり、何らかのパースペクティブみたいなものをつくり上げていく必要があるんじゃないかなと思います。

ないかなと思います。

これだけ地方が疲弊しておりますが、見方をかえると、地方はある意味では最先頭のランナーだってよくいわれますよね。東京は人口が増えていますけど、これからは減ってくるわけで、人口減少する社会というのは、すでに先に地方が入っています。ですから、こういったことも含めていろいろなディシプリンから議論をして、慶應義塾なりの情報発信をするということが、社会のお役に立てる実学になるんじゃないかなということを、今日は大変勇気をいただくお話で感謝しております。先生方、本当にありがとうございました。

羽田 経済学部で羽田です。よろしくお願いします。保井先生、和気先生、とても貴重なお話、とりわけ私にとっては非常に刺激的なお話を聞かせていただきました。和気先生は文明塾は立ち上げのとき以来いろいろお話を伺う機会があったのですが、文明塾とは別の、それこそ四半世紀に及ぶプロジェクトのお話を今日初めてお聞きして、ええっという驚きとともに、そのプロジェクトがあって、今、ここに和気先生がおられるのだなということがとても納得できました。

話が少し前後しますがけれども、ご承知の通りこのセミナーは教養研究センターが主催しています。センターでは教養とは何かということをいろいろ議論しながら、また、それをたとえば教育にどう落とし込むかということを考えてながら10年近く活動してきているわけですが、教養という言葉はよくも悪くもいろいろな手かせ足かせになる言葉だということをあらためて感じました。

といいますのは先に触れた文明塾、これは和気先生の環境プログラムと、もう1つコアプログラムという2つの軸を中心に走っているんですけども、そのコアプログラムの方のプログラムコーディネーターとして、私はベーシックナレッジを担当しています。これは要するに将来リーダーとして活躍していく人間にとって教養というものをどう考えるべきか、それがどういう重要性を持っているかということについて3カ月の限られた時間の中で伝えることを目的としています。しかもベーシックナレッジはせいぜい5回でできればいい

かなというセッションなんですけれども、実はそこで教養が身に付くはずはないんですね。これは、私たちも初めから承知で確信犯的にそういったプログラムをつくっているんですが。

ただ、もう一方では、今、飯盛先生がおっしゃったような「藤沢検定」をやるようなグループが修了生の中から実際に出てきて活動していつてくれるということ。これは彼らが3カ月の間グループワークをしながら自分たちなりの解決すべき課題を見つけて、その解決をめざした活動を実際の現場の中で実践していこうということで、文明塾自体が初めから持っていた意図という点で言えば、私たちにとってもとてもうれしい成果として受け止めています。

今日のお話との関連でいえば、特に保井先生が積極的に展開されている地域活性化のプロジェクト、これは喫緊の問題をいろいろな形で受け止めて、理解して、1つの解法を求めていく、またそれを評価していくというサイクルをつくっていく活動、いわゆる課題発見・解決型の活動だと思います。とりわけ興味深かったのは「システムズアプローチ」です。話が再び横道にそれますが、私は教養研究センター主催で庄内を舞台にして庄内セミナーというものを2008年から2010年の3年間行ってきました。

ただ、そのときの最初の取っ掛かりというのは、「よそ者、若者、ばか者」で言えば、もはや若者でこそありませんがよそ者とばか者の2つの要素を併せ持った私が、勝手にある種の思い込みでTTCK（慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス）を使った何らかのセミナーができないかと考えたことでした。もちろん、自分なりの事前学習みたいなことはしたつもりなんですけれども、実際にそのアイデアを持って現地に行って、市の方、地元の方と話していく中で、本当に自分はばかだなというふうに思いだしました。現地が抱えている問題やTTCK、慶應大学、あるいはセミナーに参加するはずの学生たちへの期待値などを知るにつれて、教養の「手かせ足かせ」を実感させられたからです。

私は庄内という場所を使って、何らかの教養セミナーができないかなということを考えていました。そのとき頭にあったのは漠然とした形ですがアスペン・セミナー

で、ああいったものをTTCKという場を使ってできないか、学生が知的な基礎体力をつくる場として、そういったセミナーを展開できないかなと思って行ったわけです。

実際に現地に行って、こういうことをやりたいけれどもご協力くださいというようなことを関係者の方にお話しすると、いや、せっかく来てくれるならもうちょっと我々の地元の問題、課題というものに関しても目を向けてほしい、あるいは我々が持っているさまざまな伝統とか文化とか、そういった知財的なものをもっと活用してほしいということを言われるわけですね。そのうちに、だんだんその熱意にのみ込まれてしまうようになっていくんです。

結果的には実際にいろいろな形でご協力いただきましたし、学生にとっても十分な学習効果があったと思うんですけれども、かなり忙しい、それから最初の予定と比べると間口の広いセミナーに傾いてしまった、また軸足が少し別のところへ移ってしまったという印象がありました。そのときにシステムズアプローチ的方法論を保井先生に教わっていれば、私が足をすくわれてしまった部分の、少なくとも一部は解消できたかもしれません。その上でもうちょっと実効的・実質的な、私の意向と地元の期待を包み込むことの可能な形の話し合いの場が事前に持てたのかなという気がしていますね。その点では今日お話を聞いただけでも十分ではありますが、もうちょっと早く出会っていればよかったなということをつくづく思いました（笑）。

もう1つは、継続性とか持続性の問題というのはどんなプロジェクトも必ず抱え込む問題なのだと改めて痛感しました。とりわけ二十数年に及ぶ和気先生の中国環境プログラムです。いろいろな形の問題、特に心的なものを強調されておられましたが、これはもう庄内セミナーも同じような問題を抱えながらずっとやってきています。それがこの先どういう形でつなげていけるのかという、持続性の大切さと、それからもう1つは地元もそうですし、プロジェクトをやる側もそうですし、実際に参加したメンバーにとってもそうですが、その先どういう形で広がっていけるのか、展開できるのか、そしてその発展性についてある種の見通しが立てられるのかどうか

というのが、とても大事なんだということを特に和気先生のお話を聞きながらつくづく思いました。

実際、和気先生のプロジェクトは目に見える形での展開、進化というものをされてきています。今年、庄内セミナーを再開しますので、先生からお聞きしたことをそこでどうやって生かしていけばいいのか、ヒントとして私自身がうまく消化できればいいだろうなと感じました。その上で更に突っ込んだ話をもうちょっとお聞きできればというふうに思いました。

ですからコメントをすれば、本当にいろいろ勉強させていただいてありがとうございますという、ほとんどその一言で済んでしまうんですけども、その中でもし後でお答えしていただければうれしいと思うことを少しお話します。全体として見ると、現在の日本は混乱状態にあり、いろいろな面で危機的状況にあって、問題対応にスピード感が求められています。そういった状況の中で、どちらかというと私がやろうとしているのはスローな、少し時間をかけてじっくりと進もうといった、時代状況に逆行するようなことを考えているので、そういったものを時代や社会とどういった形でつなげていけばいいのか、その辺のことにに関してご意見やお考えがあれば、ぜひ聞かせていただきたいなということを強く感じました。

それから、これも和気先生がおっしゃった「物語を作る」ということについて。これも非常に大事なことなんだろうなということを感じています。ただそれもとえばいい年齢をした私が考える物語と、それから若者たち、学生たちが自分自身で考えたり、あるいは彼らなりにそこに夢なり未来というものを託せるような物語という、この辺はどういうストーリーの作り方をすればいいのか、どんな関係性を踏まえてストーリーを練り上げていけばいいのか、もしそういったものについてのご経験なりお考えがあれば、ぜひ、聞かせていただきたいと思います。これが2つ目の願いです。

あともう1つは先ほどの最初の問題にもかかわることです。つまり、カウンターパートのことなのですが、その役割は非常に大事だということも実感しているつもりです。関係の結び方というのは、プラスに働けば人的ネットワークが広がっていった、プロジェクト自体が、事業

自体がいろいろな形で発展していくという、貴重な財産を提供してくれるんだろうと思っています。それだけに、人間関係の結び結び方のコツと言いますか、むしろ、本質的なところで必要な条件、心がまえといったことを教えていただけると助かります。

この点については、経験のご豊富な保井先生にもぜひお願いします。これは学生にとってもすごく大事なことだと思います。私自身のみならず、学生たちにも先生方のご経験、お考えを伝えることで、それを生かしていきたいと思っていますので、お話しいただければと思います。

ということで何か最後の方は非常に個人的な問題に関して、無理を言うような形のお願ひばかりになってしまいました。けれども、最初に戻りますけど、本当に久しぶりに何か充実感を感じることでできる時間を共有させていただけたことに、あらためてお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

牛島 牛島です。今日はありがとうございました。本当に初めてお会いしてお話を伺う保井先生のお話が大変魅力的で、それから和気先生とはたぶん20年近くお世話になり続けているかと思うんですけども、こんなに素晴らしいことをやられていたということを少しは伺ってはいたんですけど、ああ、こういうふうにつながってたんだと、今日初めて理解して、大変感銘を受けたと



羽田 功氏

ころです。

2人の先生のお話を聞いて、これをどうやって収奪してやろうかということ、それから何か貢献できることと
いうのがあるのかなという、両面でお話を伺わせていた
だきました。まず保井先生のお話の方からコメントをさ
せていただきたいと思います。システムズアプローチを
中心にして、プロトタイピング、デザイン手法、その解
決策を実行していく際のマネジメント手法を組み合わせ
た考え方、手法というのは、どの分野であっても学ぶべ
き点というのは非常に大きくて、これをSDMが提供し
ていただくというのがベストなのかどうかというのは、
ちょっとよく分かりませんが、大いに我々も学んで、
フィールドに出る学生に対しての1つの物の見方、
スキルとして、実際に使うかどうかは別にして、何かち
ゃんと触れる機会を与えるというのがいいんじゃないかな
と思いました。

それからたとえば我々のような異領域の専門分野の人
間とか、もしくはちょっと違うスタイルのフィールドア
クティビティー、フィールドワークを行っているような
タイプの教員とか学生と、どういうふうにかかわり合
いが持てるのかなというのを考えた場合、1つはたとえ
ば私は産業史、経営史という分野を商学部で専攻してお
りますけれども、保井先生のお話の中で出てこられたス
テークホルダー間の関係は常に念頭にある問題です。こ
こまでシステマチックには意識してないかもしれませんが



牛島 利明氏

けれども、関係性がどういう問題を生み出すか、どう成
果を生み出すかという蓄積は、歴史的にも地域的にも非
常にさまざまなケースを提供できる可能性があります。

コモンズの問題というのも、これもある意味、経済
史の非常に大きなテーマです。おそらく今、生きている
フィールドの経験とか分析に加えて、それとはまったく
違うタイプの歴史的なケースというのを、保井先生の一
ような方が分析することがあったら、これはお互いにとっ
て非常にプラスになるのではないかというふうに思い
ました。

もう1つ、フィールドワークとかフィールドワーク教
育という点からしますと、特に日吉の先生方を中心にし
て活発に行われているような活動は、どちらかと言えば
初めから明らかな問題解決を志向して、現地に乗り込
んでいくというタイプのものよりも、言い方はいろいろあ
るかと思いますけれども、たとえばステイ型とでも言う
んですかね、現地に長くとどまってフィールドを長く観
察して、それから何をするかゆっくり考えていくとか、
もしくはそれぞれの先生方がコンテンツとして提供でき
るような、さまざまな文化とかアート、スポーツとか、
そういうものをその地域で展開されていくタイプの活動
が多いように思います。これもたぶん保井先生が実践さ
れているタイプの活動とはかなり違うように見えるんで
すけど、おそらく役割分担みたいなものとか、使えると
ころというのはきっとあるのではないかと思います。

保井先生にはたとえば社会科学でも人文科学でも、も
しくはアートとかスポーツとかというものでもいいんで
すけれども、先生方が回されているサイクルの中のどこ
で出番があるのかという点を、ぜひアドバイスいただ
ければというふうに思いました。

たとえばバリューチェーン分析が出てきましたけれど
も、たぶんこれはある局面で、地域のコミュニティが持
っているある関係性が表出してくる場所があって、ステ
イ型で研究されている、その現地にずっととどまって観
察されている方は、もしかすると違う面で違うバリュー
チェーンを発見されているかもしれない。そのバリュー
チェーンというのはここで描かれているものとはまった
く違う関係性の、まったく違う次元のものが出てきたり
するかもしれない。

つまりその地域コミュニティというのは必ずしも平面的、安定的なものじゃなくて、たぶん場面、場面によってかなり変化をするダイナミズムというものがあると思います。おそらく長いこと滞在されてご研究を続けておられるような方は、まったく違うコミュニティのバリューチェーンとかつながり方というのを、発見されている可能性もあるかと思うので、バリューチェーン分析に、またちょっと違う側面で貢献することができるんじゃないかと思います。また、たとえばアートとかスポーツ、その他、文化というのは、課題解決型と直接結び付かないように思われる方もいるかもしれませんが、私は保井先生がおっしゃっていましたブリッジになるというところで、非常に強い力を持つのではないかというふうに思っています。

飯盛先生のコメントの中でも、聞き出すだけではなくて内面を発見するというのがありましたけど、たぶんそういう活動にも非常に役に立つ。たとえばそれがアートとかスポーツの力だと思うので、「よそ者、若者、ばか者」と言われましたけど、若くなくてもたとえば文学者であったりアーティストの持っている力というのは、これはたぶん大学しか発揮できないブリッジとしてすごく有効に働くのではないかと思います。ただ、「いつ」、「どういうふうに」やったらいいかというのが分かりづらいので、そういうところではお互い連携して、1つの地域で協働してやるというような事例をつくっていくことが、これから重要なかもしれないと考えました。

和気先生のご研究は、本当に長年にわたるご努力の成果で、研究と実践が結合した、まれに見るケースだなと思います。ずっと中国の環境に関する共同研究のお話を伺っていて、和気先生がこういう活動と教育とのつながりをどういうふうに考えられておられるのかなと思ったところで、後半で福澤記念文明塾の話が出てきて、ああ、和気先生のこの20年間やられてきたことというのは、そういうふうにつながっているんだというのを今日初めて理解させていただきました。

おそらく我々の行っているような活動はまだまだ短いのですが、どれも結構属人的なところがあって、1人でなくてもせいぜい数人の興味、関心が同じ、志を同じにできる人たちが小じんまりとやっているというケー

スが多く、長くなればなるほど当然大学内での継承をどうしていくかという問題が出てくるのは、どの活動でも問題になってくることだろうと思います。ですから、大きな物語というのを維持しながら、その中でおそらく小さな数年で回っていくようなストーリー、サイクルがあって、そこに若い人が出たり入ったりできるような仕組みをつくらないと、やっぱり1つの大きなプロジェクトで20年、30年というのは、なかなか難しい問題が出てくるんだろうなというふうに痛感しました。

地域連携活動とかフィールドワークというのは関係資産が非常に重要なので、大学内での継承もその問題はらんでいますし、地域の方も人が変わってきますから、それをどういうふうにクリアしていくのか、これはまた飯盛先生に教えていただいた方がいいかもしれませんけど、大学と自治体との連携のモデルも、長期継続を支える1つのモデルになり得るんじゃないかなという気がしております。

そして保井先生の先ほど出ましたバリューチェーンも、おそらく地域、つまりフィールドのバリューチェーンを書くのと同時に、連携活動の場合は大学を交えたバリューチェーン、大学内でのバリューチェーンというのも含めて分析すれば、大学の地域連携を考えるために役に立つような気がしております。

それから和気先生にお伺いしたいと思ったのは、かねてから福澤記念文明塾は魅力的だなと思っているんですけども、同時にちょっとアンビバレントな感じもあって、私のゼミでも文明塾にトライしたいんですけどという学生が、たまにいますけど、何かゼミでないものを求めて行かれてしまうみたいな複雑な気持ちになることもあります。

今、福澤記念文明塾で行われているようなプログラムは、たとえば和気先生と私が所属する商学部のカリキュラムとの関係を、どう築いていくのかということと、3年生、4年生でももちろん効果はあると思うんですけど、場合によってはもっと早く経験させてもいいプログラムなのかもしれない。学年ごとの比率などは全然存じ上げないんですけども、これから文明塾という新しい教育、もしくは研究のやり方というのを、既存の学部のカリキュラムというものと、どういうふうに関係させてい

く構想がおりなのかお聞かせ願えればと思います。

いずれにせよ2人の先生のお話は、インターディシプリナリーな研究とその成果というのが反映された活動で、どうしてもフィールドワークをどうやって教育にという方に我々行きがちなんですけれども、もう1回その原点に立ち戻ると、やっぱり我々教員がやっている研究というのがいかに展開して、広げられるか、お互いにつなげられるかという、大学内での交流がないと、たぶん地域に出たときにいい活動とか、いい貢献というのができないんじゃないかなというのが、通しての感想ということになるかと思っています。どうもありがとうございました。

種村 どうもありがとうございました。牛島先生が最初おっしゃっておられましたが、保井先生が今日お話してくださったシステムズ・アプローチをぜひ教養研究センターの教員、あるいは我々の学生にご紹介いただき、その中から我々の研究、教育に対するヒントを得られないかというのは、私も感じておりまして、非常に我が意を得たりと思いました。

ただ今、お三方のコメントをいただきました。コメントの中で、講師の先生への質問が出されました。羽田先生から、現代はスピード感が求められている時代である。地域貢献の場においても、連携の場においても、そのようなスピード感というものが求められている時代に、スローな、長いタームを見据えた活動というものをどう行っていけばいいか。これは日吉の教員が教養教育という枠組みで社会・地域と連携した活動を行う場合に誰もがぶつかる問題だと思います。それから物語を作るというときに年齢の上の教員と若者とが共同で活動する場でのストーリーの作り方についてのお考えをいただきたい。さらに、カウンターパート関係の結び方について、もう少し踏み込んだお話をいただきたい、以上の3つの質問が出されました。

牛島先生からは、文明塾のアンビバレントな性格に関して、既存の大学のカリキュラムとの関係性をどう構築していくか、またもっと早い学年から参加させてもよいプログラムに感じたけれども、そのあたりの今後の展望について質問がありました。これらの質問にお答えいた

だきながら、お話をいただきたいと思っています。

保井 私からすると雲の上のようなお偉い先生方から非常に素晴らしいコメントをいただきまして、厚く御礼申し上げます。非常に緊張していましたが、何かやったか

いがあったなとすごくありがたく思っています。ご質問は大きく分けて2ついただいています、たとえば庄内に行って、あるいはほかの地域に行って、問題解決を求められているのはものすごくスピードが速いんだけど、どうやったらそれをじっくりサステナブルなものにできるんだろうかという問題意識ですが、非常にいいご質問だと思っています。1つは私どもがこのシステムズアプローチ、場づくりであったり、ご指摘いただいた例のプラットフォームのつくり方なんですけれども、プラットフォーム内に場をつくることはステークホルダーによってお願いしたいことです。我々は単なるファシリテーターなんですと、その方法論を地域のステークホルダーの方に共有していただいて、この方法論を使ったら今日出すその問題解決の答えと、5年後、10年後に出す問題解決の答えは当然違ってくるので、それを持続的にその地域の方にやっていただこうという、自ら選び取る問題解決の力をこの方法論で付けていただくというアプローチになっております。

したがってこれをやったから、さあ、すごくいい解決策が出ますよというのではなくて、システム・コンプレキシティ、システムの複雑性と言うんですけど、何を言っているかということ、あるシステムにガチャボンとインプットするとアウトプットが今日と明日で違うと、同じそのガチャボンのブラックボックスなのにとのことです。

それは実はシステムの複雑性という言葉で表しますの

で、そういうシステムの複雑性を持ったようなブラックボックスというかその方法論を、その地域のステークホルダーの方に共有していただく、それで自分で使うようになっていただくことにしていくと、たとえば政策というのは霞が関から来るものであるとか、役所の人が考えるものだよということではなくて、そのステークホルダーの方がご自分でこういう方法論を回して、考えていただくようになるんじゃないかと。それはでもおそらく

スローフードならぬスローな政策のつくり方を、入って
いってやっていただくということだと思っています。そ
ういうことが問題解決とサステナビリティが両立す
る道なのかなと思っています。

そういう意味ではカウンターパートの問題って非常に
重要で、私どもも試行錯誤してまいりまして失敗したこ
ともあります。比較的うまくいっているのは、やっぱり
塾生の方、慶應卒業生の方から入っていくとか、または
慶應の学生がやっている NPO から入っていくとかです
ね。そこはやはり、ものすごく感度が強くて、これは実
際論なんです。そういう三田会など地域の慶應のつなが
りを1つの中心なチャンネルにしてやっていくというの
を、私どもは比較的、重要視をしています。

また別のご質問でアートとかスポーツにどう適用す
るのか、他領域の問題ですね。我々も実はアート、スポー
ツ、ほかのいろいろな領域に適用したいと思っていて、
たとえば、まだ研究自体もスタートしてないんですが、
やり始めたいなと思っているのは共感研究です。何でみ
んなは共感するんだろうみたいなことです。エンパシー
とかシンパシーと、いわれていますが、たぶんインタラ
クティブなデザインがそこにあって、感情のやりとりが
あるんだと思うのです。

そうするとエンパシーを呼ぶようなもの、最たるもの
はアート、パフォーマンス、演劇というもので、そのお
客さんと演技者が一体になって価値づくりをするという
のはどうなんだろうかというようなことを、まさにご指
摘の通り、我々としても少しずつやり始めたいと思っ
ています。

またバリューチェーンの問題はまさしくその通りで、
局面、局面によってステイしてらっしゃる研究者の方
と我々のように一見さんで行く研究者では、バリュー
チェーンの描き方が全然違います。それはおそらくそ
うなるんだろうなと思っただけで、それはどっちが
いいというわけではなくて、むしろバリューチェーン、
CVCA(顧客バリューチェーン分析)をそこにいるステー
クホルダーの人たちが自分たちで描けるようにしてもら
う、今回は私たちで描いてしまいましたが、そうではな
く地域の方にご自分で描いていただくのがいいのかなと
いうことを考えています。



保井 俊之氏

そういうことを考えていくと、どちらかというと地域
に何を連携していくかという、そういうたとえばエス
ノグラフィーであったり、あとはフィールドワークで
あったり、マイクロエスノグラフィーとかという世界も
ありますし、そういったものを地域の方がご自分ででき
るようにするファシリテーターの役割に徹して、そこか
ら少しだけ研究の果実をいただくかな、そんなふうに
思っています。

和気 今日私の取り組みをご紹介しますだけで、皆さん
にどれくらい参考になるか不安に思っていました。先
生方のコメントを伺ってちょっと安心しました(笑)。
まず、羽田先生のご質問からですが、物語性をどうい
うふうに築くかというときに、私がプロジェクトで心掛け
たことは、1つの目標を設定するだけじゃなくて、いわ
ゆる「CO-ベネフィット」と言うのですが、単一のイッ
シューではなく、経済にもいいし、環境にもいいし、人・
地域にもいいし……というように必ず複数のいいことを
並べ立てるようにしています。ひとつうまくいかなく
なったときに、全部だめにならない知恵です。

いうまでもないですが、社会というのは相当程度に複
数のゴールの複合体の中で意思決定や行動が決まってい
るので、特定の狭い目標値に話を閉じ込めてしま
うとリアリティーが窮屈なものになってしまいます。です
から、いろいろな要素を加味した物語をできるだけ複
合的に作ることに努めています。もともと国際経済学

を学術的なバックグラウンドとして研究をしてきてはいますが、早い段階、80年代から「環境と経済のウィン・ウィン関係」などといった持論を発信していました。当時は、あるいは現在もそうですが、環境と経済はトレードオフという風潮が圧倒的で、環境規制が厳しい国は国際競争力を失う、したがって環境規制をあまり厳しくできないなどという考え方から抜け出せないでいます。環境と経済はウィン・ウィン関係にあるべきという信念のようなものに動かされて、それらしい物語を自分の中に作って、それを学生や他の研究者と共有しようと努めてきました。そうすることで、ざっくりではありますが、前向きな関係性、研究の“きずな”が生まれると思っています。

それからカウンターパートは本当に難しいです。特に中国をご存じの方は分かると思うのですが、たとえば中国でCDMという言葉を使用したときのことで。役所の方はただちに「チャイナ・デベロプメント・メカニズム？」と反応しました。なんでもチャイナなんだなと感心した覚えがあります（笑）。「クリーン・デベロプメント・メカニズム」と何度も言っているのですが、どうも最後には、Cはチャイナになります。現地にとって環境と経済のウィン・ウィン事業という言葉が先行してしまい、正確な表現方法はどこかに追いやられてしまうといった感じです。要するにCDMというのは日本にとってクレジットが入るからいいということ以上に、中国にとってもいいですよという説明が独り歩きし



和氣 洋子氏

ました。そういう時は、あえて間違いを指摘することなく、大きな枠組みの理解があれば第一関門はクリアーと思って対応しました（笑）。しかし、その後におけるCDMに関する中国におけるキャッチアップと浸透のスピードは目を見張るほどでした。

いずれは分かりあえると信じ、あまり厳格な合意形成にこだわらないということも重要な知恵かと思います。もちろん状況にもよりますが、少々のもすコミュニケーションは許容の範囲、多少は受け入れるという感覚を持たないと、特に海外とのプロジェクトはうまくいかないですね。誤解されやすい言葉かもしれませんが、「厳密」よりも「適当」が良い場合が多いように感じます。このCDMの経験は猛烈な印象です。

それから商学部で同僚の牛島先生に私の話を聞いていただき、このような機会をいただいたことを感謝しています。福澤文明塾に関するご質問についてですが、私たちが文明塾をつくったときに考えたことは、まず塾生にはファーストメジャーをしっかりと勉強して、あるいは社会人としての実績を踏まえた上で、文明塾に来て欲しいということでした。所属する学部カリキュラムのもとでしっかりと専門のディシプリン、たとえば経済の学生でしたら、ケインズ経済学などを理解していることが前提です。つまり文明塾での学びは、ファーストメジャーに加えて、いわばセカンドメジャーとして社会・環境・情報・文化などを学び合う、専門の壁を越えて学び合うということと位置づけて欲しいと思います。現役の学生にとっては少なくとも既存のカリキュラムを代替するものではなく、あえて言えば補完する場と考えてください。したがって、ゼミ活動を通じてしっかりと学び、卒論まで書いていく能力のある学生で、さらに余裕があって文明塾で自分の能力を開発させたいという学生が対象です。

学生の早い段階で入塾を考えたらどうかというご意見ですが、応募対象者は学部生以上であれば完全にオープンですから、実際のところ学部1～2年生からの応募ももちろんございます。ただ、今、申し上げたようにファーストメジャーとしてある程度専門性を身につけていたほうが、文明塾における対話と議論を通じて得るもの、あるいはそれへの貢献も大きいと思っています。

文明塾プログラムは3カ月ですから、そこで体系的に勉学の基礎やスキルを得るというわけにはいきませんので……。

種村 どうもありがとうございました。非常に懐かしい私の大好きな中国の雰囲気を感じることができ、うれしくなっていました。

和気 最近の中国は変わったんですか。

種村 いえいえ、同じです（笑）。何だか、和気先生が中国の大人（タイジン）みたいな感じがしてきました（笑）。

和気 逆に私が中国化しちゃったというのでしょうか、そんなことはないですが（笑）。

種村 素晴らしい交流だと思います。コメンテーターによるコメント、それに対するお2人の講師からの回答という形でお話が進んでまいりました。この後は自由な討議に入っていきたいと思います。今日のお話にかかわること、あるいはこのセミナー全体にかかわること、いろいろな問題を投げ掛けていただければと思います。

長田 経済学部部長と申します。本日はいろいろ示唆に富むお話、ありがとうございました。保井先生に伺いたいのですが、実は私は現在、高山市郊外の問題に取り組んでおり、学生と何度も現地に行っているのですが、今回のお話にあった秋田の事例などのように、こんなにきっちりとした評価まで、手がまわりません。

もちろん、秋田の事例を見ると、かなりの準備を行い、調査の終了後にデータの整理をして状況の正確な把握をするには凄く時間をかけているとお見受けします。先程のお話の中では今回は研究という側面もあったとおっしゃっていましたが、通常でもこのぐらい細かくまとめられているのかということをお教えいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

保井 貴重なご質問、ありがとうございます。これはもう楽屋話から始めてしまった方がいいようですね。我々

のSDM研究科というのは、まだ新しい研究科で、できて3年あまりです。ですから、とにかく認知してもらわないと立ってられないみたいなどころがあります。とにかく早く論文を書こう、早くジャーナルに載せたいというような切実な思いがあるわけです。

何と云うか、有り体に言えば「必ずしも超一流ジャーナルじゃなくてもいい、とにかく早く載せるんだ」という気持ちで私自身は一生懸命やらせていただいています（笑）。今回は、ご縁があって秋田に行きましたが、とにかく本年度中に論文が1本できれば、注目してもらえるというので焦っていたということです。したがってこれ自体は実は試行錯誤でした。本来は、もっとじっくりやるべきですし、もっと地元のいろいろな方を巻き込んで行わなければならないのですが、とにかくこれはそういうふうにはやらないと我々は死んでしまうという切迫感があった、ここまでできました。ですから、先生もおそらくお気付きの通り、かなり仮設住宅的なところがたくさんあります。本当はゆっくりおうちを建てた方がいいと思っていますので、ぜひ、その辺のノウハウについてはアドバイスをいただければと思います。

長田 私の場合は学部1～2年生を中心に動いているものですから、どちらかというと、保井先生がご紹介された手法のうちの1つをマスターするだけで、かなり時間がかかってしまいます。これだけのことを行おうとすると、それこそ学生2～3人につき教員1人ずつについて5グループぐらいかけることになります。教養研究センターでアカデミック・スキルズという授業がありますが、今年はその中で、調査の仕方を実践してみようという授業を担当しましたが、そのときの経験でいくと、だいたい1人の学生がインタビューを事前に設計して実際に取ってくるだけで、1カ月から2カ月かかりました。

これは、だいたい途中で何かミスをすることがあるからなのです。ミスをするというのは、学生自身が失敗するということと、教員がうっかり指示し忘れたため起こるものの両方があります。ですから、これをよくこれだけの期間できっちりとまとめられたことについて、正直、素直にお聞きしたいと思いました。

そういう意味でいくと、まずチーム作りの問題に興味

があります。幸い、自分のところでも学生数はそこそこあります。日吉ではいろいろな学部の人があるので、声を掛けると人数が集まります。それよりもどう編成するかが問題になります。あとは、実際に現地に行く準備の問題があります。大学近辺をフィールドとするならば何回でも出かけることができるかもしれませんが、たまたま縁あって遠いところに伺うことになる場合、あまり何度も訪れることができないので、事前の準備と、事後のフォローが大切です。

私は学生のいいところというのは思い切りがいいところだと思うんですね。これはどうだみたいな感じで出してくる部分があるんですけど、一方で思い込んじゃったら走り過ぎちゃうところには気をつける必要があります。現地の方から「そんなこと、俺たちは頼んでない」というような一触即発になりかねない部分が時にあって、それをどうバランスを取るかというところに、ちょっと腐心しています。今日は保井先生のお話を聞きながら、すべて取り入れるのは無理にしても、ちょっと上手にできないかなということは考えてみたいと思っています。

それから、和気先生にも質問をしたいと思います。やはりプロジェクトを20年とか25年と続けてくると、いろいろな分野の方が入っていらっしゃると思います。つまり出たり入ったりがすごく忙しかったんだろうと推測いたします。こうした地域物をやっていると、どうしても先生がちょうど中継役的な役割を果たされたのではと思うのですが、その窓口としての役割、それから同時に、新しく来る人にどう伝えるというか、どう受け取ってもらうとか、また途中でこのプロジェクトから遠くなる人にどう残していってもらうとか、そういう蓄積が重要になるかと思うのですが、いかがでしょうか。

そのあたりですごく気を付けられたこととか、あとは結果としてこういうことがよかったんじゃないかということがありましたら、教えていただきたいなと思います。

和気 それが一番難しいですね。資金的には工夫すれば何とか予算を得ることができますが、人と人の関係において、一旦コミュニケーションがうまくいかないと、そのプロジェクトの遂行は本当に難しくなります。そして

私自身が経験から学んだことの一つは、自分の専門領域にこだわりすぎると、他の領域との接点を持つ機会を逸してしまうということです。たとえば私自身は国際経済学をベースにしていますが、それは問題解決にむけての有用な知見の一部でしかないわけですから、たとえば自然科学系の専門の先生方とお話をするときには、自分の専門性はほんの一部だけの足掛かりにしながら、それ以外は空白・白紙と言うとちょっと大げさですが、ゼロから勉強するつもりで柔軟に対応します。私たち自身が知的交流もせず、異なる専門家同士で名ばかりの共同作業をしても、最初の1～2年は大丈夫かもしれませんが、長くは続きません。お互いに共同研究プロジェクトの先に期待できる何らかのビジョンを共有することが何より大事だと思います。

繰り返しになりますが、自分の専門にこだわりすぎないこと、この機会に他の専門領域を学ぶという謙虚さをもつことが、とても重要です。研究業績との関係ではたしかに悩ましいところもありますね。自分の専門領域での業績が残せないとなれば、この種のプロジェクトに与するメリットが必ずしも感じられないかもしれませんが、ものごとを狭く考えるよりは、その活動を通じて学生や若手研究者たちがいかに育っていくかというところに自分たちの業績を反映させる、投影させるというぐらいいのつもりでないと、こうしたプロジェクトは長続きしません。そうしてみると年寄りが向いているのですが、矛盾もあります。プロジェクトの老化、高齢化が問題ですが、さりとて若い先生方にそんな調整役を頼めないですから、その辺が悩ましいですね。たまたま奇跡的に複数のコアなメンバーが長い間変わらず携わってきたという事実はやっぱり大きいですね。私1人ではもちろん続けられなかったでしょう。

種村 短い時間、限られた期間の中で、どのように教育して、どのように高成果を出させるかという工夫について、飯盛先生にも何かお話しいただけたところがあるのではないかと思います。いかがでしょうか。

飯盛 大変難しいですね。ただ、私たちも短期間でということ、あまりないのですが、でも現地に入るときに

は当然、事前にその地域のことなり、イシューに対して勉強してもらうというのが1つと、あとは研究会の授業など時間全部を使って、やっているものを総動員しているというのが、1つあると思います。

それからやはり私の場合、前回もご報告させていただいたように上五島とか、高知とか、鶴岡、八女市など、遠方によく学生たちと出向きます。

どこに行くにしても、チームリーダーがおりまして、そのチームリーダーが全部統括して、何をどう勉強してということをしっかり明確にしているというのが1つ大きいですね。もちろん、報告は来ますが、私たちは「自分で考えてしっかりやってね」と、それぐらいしかしていませんが個別の勉強は大事です。

目標ですね。今回は「ここまでいこうよ」ということは確実に明示するということもしています。それからうちの研究会の学生たちは、遠隔会議システムを使っておりまして、それをいろいろな地域の方々のところに行った際に、片方の端末を置いていくんです。そうすれば、戻ってきても向こうと話をすることができます。そうして、学生たちは週に1回くらいのペースで現地の方々との会議をして、擦り合わせをしながら進めております。ですから、やはり急に行って短期でというのは、やっぱり難しいかなと思っています。

私から、先生方にご指導をお願いしたいと思うのは、こうした地域活性化とか社会地域連携の活動を通して、この大学以外のステークホルダーの方々に最終的に成果を示す際の何かいい秘訣やポイントというものを伺いたいと思います。やはり、たとえば何か予算が絡んできた場合には、数量的な成果とか評価を示せることが一番なのですが、どうも地域活性化の活動というのは数量的に示せるものがない場合も多いです。

たとえば「経済効果がこれだけありました」と言えればいいのですが、見える経済効果が出るところまではっていないかもしれない。仮に人材育成の講座をやったとしたら、その成果をどうやって大学以外のステークホルダーの方々に示せるのか。やはり、こうした活動では事前に現地の方々と擦り合わせをし、ある程度理解していただいた上で活動に入りますけれども、直接的に、誰が見ても分かるようなものがあり得るのかどうか。

やはり継続していくためには成果を出していかないと難しいかなと思っていますので、そういった部分で、先生方のいろいろなお知恵を拝借できればなと思っています。よろしくお願いします。

保井 先程、長田先生からいただいた質問の際にお話をしてあげればよかったと思って忘れてしまったことなのですが、SDM 研究科では、私たちがまさに秋田で実践したような方法論を、学生がチームに分かれて5月から11月まで学習します。こういうメソッドがあるとか、ツールにはこういうものがあるというのは全部実習をして、課題も与えられて、インタラクティブに自分でデザインしていくということをしていますので、修士1年生の11月には全員がこういうメソッドができていますはず。もちろん、実際には完璧にはできていないと思いますが（笑）、「できていますはず」ですので、そういう下地があることで、比較的、今回の秋田のような短期間でも、デザインができたということだと思っています。

もう1つの飯盛先生のご質問なんですけれども、たとえば政策当局にどうしますかみたいな話だと思うんですが、非常にいいご質問、鋭い質問だと思います。社会システムの問題はすべからずイコール政策設計の問題になってしまうものですから、日々、試行錯誤を繰り返しております。反発されたり投げ捨てられたり、いろいろしているんですけれども、比較的聞いてくださるやり方というのは、やはり数量化をすることですね。数量化の際に、その町なら町のステークホルダーの人たちは、これこれの数量でこういう政策を望んでいます、望んでいませんということを示すと、なるほどと言ってくれる。

「事業仕分け」は東京財団のイニシアチブで行われていますが、それを地方自治体を対象の中心にして行っていたことがあります。その際に、最初は数量目標で行おうとしました。カナダのクレティエン政権がそれで成功したからです。ただ、日本ではなかなか根付きませんでした。やはり、日本人の多くには数量化は少し苦手なところがあるようです。

その代わり徹底的にお話をする。そうすると、田舎の町などは、ステークホルダーの数が少ないですから、2

時間くらい話すと「ああ、このバス停、やっぱりいいですね」ということが出てくるのです。会話が済み、納得して事業仕分けができるそうです。したがって、そういう数量化でまずは示します。政策デザインが、「これはいらないと思います、これは新しいことをやった方がいいと思います」という提言をするんですが、だめな場合はやっぱり事業仕分けの手法でお話をして、ストーリーを共有させていただく、まさに和気先生のおっしゃったやり方になります。

他方で確かにステークホルダーが多すぎると、それがうまくいかないと思っています。国のやっている事業仕分けがやや評判が悪いのも、あれはステークホルダーが多すぎて、皆さんがストーリーを共有できないところに1つの原因があると思い、他山の石としているところです。

和気 外に対してどういうふうに通信するかというのは難しいというか、実は大きな課題です。このプロジェクトの評価という狭い話ではなく、慶應義塾がどんなふうに通社会貢献しているか、どんな研究体制や教育制度を志向しているのかななどを対外的に通信することは、塾全体が取り組まなければならない重要なミッションですよね。実は私自身のなかには、この中国プロジェクトを「CDM 事業化」することによって、慶應義塾の環境

取り組みの具体的事例の一つとして外部に通アピールしたいという思いもあったことは否めません。純粋な研究動機だけではなく、こうした思いもプロジェクトが持続した理由にあったかもかもしれません。

同じような思いで関与している共同プロジェクトがございます。少しご紹介させていただきますと、「慶應義塾自身が環境に優しい組織になる、慶應義塾自身がCO2排出量を削減する」という目標のもとで、環境と文理融合というキーワードで環境省委託事業として申請を出し、採択され本年度スタートしたプロジェクトです。余談ですが昨年3月11日に審査ヒアリングがあり、その直後が大震災でした。この委託事業はまさしく数値化された評価がメインであり、慶應義塾のエネルギー・マネジメント・システムを開発し、慶應義塾も数量的な指標をもってステークホルダーに通説明すること、つまりCO2削減量を明示することが求められるわけです。量的な世界から質的な世界へという大きな流れがあるなかで、依然として数量的な評価を要求する部分は少なくないです。大学という機関において、数量的評価に頼りすぎることは危険だと思いますが、数量的・客観的な評価を甘んじて受け入れていくという姿勢はやはり重要だと思います。内部評価の仕組みも含め、量的・質的な評価手法の総合的な開発は重要なテーマの一つですね。



不破 SFCの飯盛先生が評価ということをおっしゃると思いませんでした。私たちはまさに今、それにいろいろと悩んでいるところで、教育GPが終わった段階で、どのような評価システムができるのかというのは、当然その成果との関係で見なければいけない部分です。本当に量的な数値からすべての評価ができるかという数値化への疑念もありますし、プロセス重視だけでいいのかという不安もあります。成果物をどういうふうに評価していくのかというところでは、「アカデミック・スキルズ」の授業なども、もちろんテストを行うわけではありませんで、論文とその成果物、発表を通してということになります。今回、再開しようとしている庄内セミナーでも数量化という成果を求められるとすると、どのような形で皆さんは評価なさるのか。

それを私たちが教養研究センターとして、どういう形で塾内に語っていったらいいのかという、その部分をぜひ教えていただきたいと思います。

黒田 社会・地域連携室の黒田です。職員の側からということで、少しお話しさせていただきたいと思います。情報発信や成果の見せ方、評価については、こちらの部署としても課題に感じております。たとえば、先生方がこんなに素晴らしい活動をしているのを、慶應義塾として全てご存じかということ、必ずしもそうでもないところがありますし、故に義塾としての社会・地域連携に対してどれだけ重きを置いているかということ、まだ十分ではないところもあるのかなという気がしております。そういう中で、私どものような部署がパイプ役となり、義塾に活動の様子を伝えとともに、義塾の意向を社会・地域連携に取り組む先生方にお伝えすることで、慶應義塾の総力として社会・地域連携というものをもっとアピールしていかなければならない、その仕組みもつくっていかねばならないと感じています。

私たちの力になれるとこととすれば、たとえば先生方がいろいろなご活動をされていると思いますが、そういったものを、広報的にどのように出していくかという部分で、広報室などを通じてプレスリリースなどを行うなどの方法で塾外ともつながりがありますので、わりとうまく発信をしていけるのではないかなと思っています。

そういうところは活用していただければと思いますし、あとは、地域の自治体との連携強化という部分でお手伝いできるのではないかと考えております。実際に、これまで飯盛先生の活躍されている長崎県ですか、あと山梨県・富士吉田市、大分県の中津市など、協定を結んできました。協定を結ぶと、自治体として、市民の理解が得やすくなり連携事業への予算計上をしやすくなったり、そこで先生方が活動する際に人的な協力を仰ぎやすくなったりするようです。

あと、先生方の成果や情報をどのように地元に伝えるかというところで、活動のフィールドのある市からは市議会ですとか市民の方から「慶應と行政がどんなことをやっているか分からない。そういうものに対して予算を付けるのはどうなのか」という声が上がっているということがありました。

自治体が大学との活動の状況を把握しているかということ、実は理解がたりていないということが分かり、これは一度、活動の内容を知る勉強会をしましょうということで、まさにこういう会ですけれども、「慶應義塾大学がどんなことをしていて、今後、地域活性化など、どのように役立っていくかを一緒に考える」会を企画したようです。自分たちがしている活動をみんなに知ってもらおうとしているところです。

また一昨年には学生に地域連携活動を発表してもらう機会もありました。市のアリーナで市民の皆さんに向けてシンポジウムという形で慶應義塾の学生の活動報告と、プラスしてその地元でも似たような活動をしているたとえば婦人会ですとか、地元の高校生も、同じテーマで発表して、その後にパネルディスカッションなどをしました。それを市民の皆さんに聞いてもらって、慶應義塾は自分たちの地元でこんな活動をしているんだなということを知ってもらって、協力を仰ぎやすくする、そういう仕掛けをしましたが、そういうきっかけづくりで社会・地域連携室もお手伝いできればと思っています。

地域の方からもいろいろな要望ですとか、有意義なお話が来たりしています。たとえば委託研究ですとか、地域の活動について、ご関心のある先生はいらっしゃるかなどという話がいろいろと来ますが、なかなか先生にお伝えする機会がなく、そのままもったいないことに消

えてしまったような話も多々ありますので、今後はうまく先生方にお伝えできるようにいたしたいと思っています。

種村 社会・地域連携室の黒田さんから非常に力強いお答えをいただきまして、この連続セミナーを始めた目的のかなりの部分がこれで解決したのではないかと思います。評価の問題に関して、保井先生いかがでしょうか。

保井 評価は大変難しい問題だと思います。他方で、今我々がやっていることの評価は、ステークホルダーの方々が自分たちで編み出した政策案、ポリシー・オルタナティブを、自分たちはどのぐらい評価できるかというところに主眼を置いております。このプロジェクト、真の受益者は地域の人たちですから、その人たちの、いわゆる顧客満足度がどう高まるかということで評価をしようと思っています。

そうするとたとえば、こういう研究をして、「プロジェクトの効果は有効でしたか」という簡単なアンケートをするのですが、そういったことの度数を1つの数量基準にするとか、あるいは質的データ分析まではいかないですが、こういった発想法で出てきたソリューションを専門家パネルで評価いただき、どのぐらいクリエイティビティーが上がったかというのを数量化して公開するか、そういったことを実験的に始めている段階です。ただ、これという方法がまだ決まっていませんので、ここは今後、また試行錯誤することになると思います。

和気 ちょっと愚痴になりますが、若い研究者が積極的に後を継いでくれないのはやはり寂しいですね。あまり評価されてないのかなと……。同僚の牛島先生でさえ、私の話を初めて聞いたというような状態ではなんとも恥ずかしいです。もっとしっかりと発信すべきであったと、今さらながらに自分自身の怠慢を反省しています。自己満足に陥らずに、怠らずに对外発信することも大事な仕事ですね。もっと情報の共有に努めるべきであると思っています。

飯盛 保井先生のお話を聞いていて、私も本当にその通

りだなと思ったのは、数値で示すというのはたぶん多くのステークホルダーを納得させるだけの証拠になるのはもう間違いないことなのですが非常に難しいんですね。庄内セミナーが有効だったのは、たとえば現状ではテストをするわけじゃないということですし、何人参加したとか、そういうことになりますよね。

難しいことですが、それでも我々がやっていかないといけないことだと思っていて、そういう意味では、教養研究センターに期待したいことの1つだと思っています。もう1つはその方法論ですね。フィールドワークですとか、その地域に入って地域連携をする際の研究としての、成果につながっていくまでの方法論の話も必要かなと思っていて、保井先生の場合はシステムズアプローチの手法などをいろいろお使いになっていますけれど、たとえばSFCの場合はアクションリサーチみたいな、社会科学に適用できるかということも考えていますが、まだまだこれからなんですよ。

たとえばお医者さんがこういう病気かもしれないということで処方して、それを科学的な知見に同定させていくというサイクルみたいなことが、社会科学でできるかどうかということが1つのポイントかもしれませんけれども、それもこれからやっていかないといけないことかなと思っております。

先程の成果の話をうかがっていて、そういうことが課題として残ってはいますが、現実的にはステークホルダーを絞り込んでいると思うのです。実際、何か活動するとき、この方々が求めているものを数量的に出すということをやっぱりしているなというのは感じています。ですから最初に、活動前にこれが成果ですということを、お互いきちんと決めた上で動いているわけですね。

たとえば上五島ですと当然、地域活性化がテーマで、今回は映像制作を通じた地域活性化というテーマでしたが、それだと非常に漠然としているので、成果として当然、数量的に、住民の方が撮った、自分たちで撮った映像が何本とか、そういうのをきちんと決めておきました。それを満たしたことで一応成果というふうに見ていただくという、事前にきちんと議論をして、契約を交わして動いているというところは確かにあります。

牛島 和気先生のお話でもありましたが、同じ学部に所属する私もおぼろげにしか和気先生の活動を存じ上げておりませんでしたし、おそらく種村先生もそうだと思います。これは和気先生がどうかとか、私がどうかというより、やっぱりそういう場が非常に持ちづらい構造になっているというのもあると思うのです。前々からどうしたらいいかは考えているのですけれども、やっぱり分からない。これはちょっと愚痴のようになってしまっていますが、三田キャンパス固有の問題かもしれないです（笑）。

私は第2回のセミナーには出席できませんでしたので、できましたらSFCの場合ですとか、もしくはSDM、もちろん比較的、先生の数が少ないというのもあるかと思いますが、たとえば中でのコミュニケーションの取り方みたいなものを、どういうふうに工夫されているのかなというのを伺いたと思います。

また、飯盛先生が先程、成果を事前に決めて契約をするというお話がありましたけれども、契約の主体というのはこちら側というか大学側は誰になるのかというのを、教えていただければと思います。

飯盛 まずSFCの場合、実は文化として誰かがどこかの地域に入るときには普通にほかの先生たちが入ってくるんです。「あ、飯盛さん、上五島に行くなら僕も一緒に行きたい」と声がかかります。私たちは地域活性化のために上五島に行くわけですが、その先生方は別の分野、たとえば生態学や環境が専門の先生が一緒に入ることもあります。「一緒に行っていく？」、「ええ、一緒に行きましょう」みたいな感じですね。

この間は鶴岡で私のゼミで合宿したんですけれども、そのときは鶴岡に行ったら鶴岡キャンパスの富田先生がたまたま鶴岡にいらっしゃいました。富田先生に、「開会のあいさつしてくださいよ」と言うのと「じゃあ、やりましょう」という話になり、挨拶して下さった上で、ゼミ生の方々も参加していただけることになりました。もうそこから富田研と私の研究室で総勢60人ぐらいのプロジェクト合宿になりました。SFCでは、そういうカルチャーがあり、それが面白いところだと思います。いろいろなところで創発がおこる可能性があります。

それから「契約」と申し上げたのは、いろいろなパターンがあり得ますけれども、多くの場合は契約主体はたとえば自治体と研究支援センターが契約して、実行者、たとえば研究遂行推進者が私というような契約になっています。

牛島 その研究資金も委託研究の受託の契約という形になるんですか。

飯盛 その通りです。そういう形で資金を受けた場合は、ではその成果物は何にするのか、何を出せばいいのかということを事前に決めた上で、契約を取り交わしてという形になります。もちろん細かい取り決めもします。たとえば最初の予算から何パーセントぐらいまでは費目の変更とかできる、その費目を変更する場合の手続きなど、そういう形を細かく調整した上で実行となります。

種村 今の質問に関連して、私からも飯盛先生に伺いたと思います。前回のセミナーでのお話から、SFCというのはキャンパスの中に開放的な空気、カルチャーがあって、しかもSFC内部でそれをサポートする態勢が非常に整備されているなと思いました。つまり、キャンパスとして社会・地域貢献、連携をする態勢が整っていると思うのです。

そこで質問したいのは、SFCとして実践できていることを、慶應全体につなげていくためには、慶應としてどういうふうな組織や仕組み、あるいはどういうものが必要になるでしょうか。我々の方には、まだそういったものが整っていない状態ですので、何が必要かというのが重要な問題になってくるのですが、SFCの活動を一歩進んで慶應全体という取り組みにしていけるために、慶應に今、必要なものはどういうものなのかということを教えていただければと思います。

飯盛 本日、ちょうど参加されている黒田さんのいる社会・地域連携室に頑張っていただくというのが、1つのソリューションかなという気もいたします。たとえば、先ほど、黒田さんから紹介された長崎の協定を結んだお話。あれは結構、大型予算だったと思いますが、ありが

たいのは学部生の旅費に使っていいということです。

どうするかというと、これはSFCに限ってはいないのですが、公募しました。長崎の地域問題解決のプロジェクトに参加したい人は、研究計画書を出すようにとして、必要な用紙をウェブからダウンロードして、記入して教員に提出してもらいます。それを教員でこの人は行ける、この人は行けないと選別をします。事前勉強会もやりました。そこには本当は三田キャンパス、日吉キャンパスの方が入っていただいても全然問題はなかったと思うのですが、カリキュラムが違うということもあり、応募するのはSFCの学生ばかりでした。

ですから、何らかの形で慶應全体のものができるともっといいなと思います。前回のセミナーでもお話しさせていただきましたが、たとえば鶴岡にお伺いして「地域の産物をどう展開するといいのか」というテーマをやってきたときのことです。富田先生のところはバイオインフォマティクスが専門ですから、鶴岡の産物の遺伝子分析をして、「なぜ『つや姫』というお米がおいしいのか」というのを科学的に分析されているんです。やはり地域産物のマーケティングを考える場合でも、旨味を科学的に証明できていると強いですね。

そこで、富田先生にも入っていただき、本当は、ストーリーを作る上でも、更に鶴岡と庄内の歴史や文化も入れたかったんです。ところが、そこについてはせいぜい私が調べたことや市役所からいただいた資料、学生が個人で勉強してきたものしか書けませんでした。もっと深く庄内について学んでおけば、地域産物の展開とストーリー作りというテーマに合致していたと思います。

ですから、前回も申し上げましたけれども、ぜひほかの先生方とコラボレーションさせていただきたいです。私も鶴岡で初めて富田先生とコラボレーションしました。SFCでは文系、理系とは言いませんけれども、でも富田先生の研究内容の詳細についてはよくわからなかったのですが、今回コラボレーションさせていただき、本当によかった、面白かったと心から感じました。

富田先生の研究室でも鶴岡の産物を分析をして、きちっとその結果が出せていたのだけど、それをどう地域づくりに生かしていくかというのはすごい興味があるとおっしゃったんですね。だから、ちょうど良かったと思

いましたし、学生の皆さんもすごく熱心でした。一番熱心なのは富田先生でした（笑）。やはり、コラボレーションするというのは良いと思いますし、それができるように連携室がお考えになっているということですから、期待しています。

黒田 本来であれば、私たち社会・地域連携室がこういったセミナーを開催しなくてはいけなかったのではないかと、反省をし続けています。先ほども申し上げました通り、やはり横のつながりを慶應義塾の総力として出していくというのは、とても意義があることだと思っていますので、その横のつながり、ご縁を、すごく地道なことになりますけれども、人と人とのパイプをつなげていくということをも私も含めてやっていきたいと思いますし、先生方とこうやって交流を深めていってつなげていきたいと思っています。

いろいろな情報が入ってきますが、こうして聞いていても、日吉の庄内セミナーとSFCでの動きというのは重なるところが多く、それは本来であればつなげなければいけなかったんですけども、私の中でとどまってしまういました。今後は情報を流通していかなければと思っています。やはり同じような例で、富士吉田市はとても豊かな地下水が湧いているんですけども、そのお水をSFCのプロジェクトチームでブランド化して商品化できないかという取り組みがあります。その水の品質を科学的に実証するというところで、実は理工学部の先生が同じように富士吉田から委託を受けて研究をされていたのですが、それがつながってなかったのです。その後、いろいろなお話や偶然なことが重なりつながることになりまして、今、共同の取り組みが始まっているところです。それから、今回のセミナーでは出てきませんでしたが、信濃町キャンパスや芝共立キャンパスでも、やはり同じようにいろいろな活動をされている先生方がいらっしゃいますので、今後つなげていけたらと思っています。

保井 つながり方についてはSDM研究科の場合はかなりユニークです。まず教員が十数人しかない小じんまりとした環境というのが1つあり、比較のお話がしやすい環境にあります。もう1つは、私は専門は行政学と



か公共政策学で、たとえば、近隣の教員は制御工学とか、機械工学が専門で、専攻はかなりバラバラですが、私たちは「システムズエンジニアリングを研究する」という基礎だけでつながっているんです。ですから、最初から専門は全然ばらばらという領域横断的成り立ちもあります。

他方で、それでうまくいっているばかりでは必ずしもありません。それぞれ忙しいですし、たこつぼ型の研究とおしかりを受けそうなことも自分自身ありますが、ではどうして自分がこういうたくさんのプロジェクトに巻き込まれていったのかなと考えると、それは学生が持ってくるんですね。学生が巻き込んでくれると言うのでしょうか。たとえば「自分はNPOをやっている、今度、福島震災の復興イベントをやりたいんですけど」というふうなんです。

そういう意味では連携したというよりも、院生の方から「〇〇先生と〇〇先生にお願いしたので、先生も政策をつくれるでしょう、入りなさい」と言われて巻き込まれていった結果です（笑）。自分からつながろうとしたのではなくて、学生たちの方が実ははるかにセンシビリティが高くて、この教員とこの教員が協力すればすごいものができるでしょうみたいなことを言ってくれるのです。そういう研究会を週1回ずつやっていると、いつ

の間にか事前の打合わせでは必ずしも十分に話をしたことのなかった教員と学生がつながっていた、そういうプロセスだと正直思います。

ですから、なかなか難しいかもしれませんが、そうしたセンシビリティの高い学生がいれば、そうやってつなげてもらえる、そういうことを受け入れて進めてもいいのではないかと思います。

柴田 種村先生のSFCのカルチャーということについて、私もSFCの先生方とお付き合いする機会が多くあったので、私なりにお話させていただきます。SFCのカルチャーというのは、おっしゃる通り、非常にオープンなんだと思います。ですから、今回のセミナーも飯盛先生に働き掛けると非常に好意的に来ていただけたのですが、SFCの先生方は前を見て走っていますから、あまり後ろのことはご覧になっていないので、三田や日吉からすると、こちらから働きかけないといけないようなところがあるのではないかと思います。

また、私は教養研究センターでいろいろな仕事をしていますけれども、このセミナーの事務局として、今回のセミナーにはかなり力を入れていました。それにはいろいろな意味があります。1つは今のことも関係しますが、私はずっと三田で研究支援の仕事をしていて、

SFC、理工学部、医学部とかとのお付き合いがあり、それぞれのカルチャー、特徴、慶應のよさがあることを実感しています。

それぞれ皆さん、慶應を代表してプライドを持って仕事をされているという状況の中で、日吉に来てみたら、外とのつながり、塾内とのつながりが十分ではないと感じました。ですから、私はそれを何とかしたくて、この社会・地域連携の仕事に力を入れてきました。飯盛先生とかほかのキャンパスの先生に来ていただきたいというのが私の思いで、実を言えば、イシューは別に社会・地域連携でなくてもよかったというところも正直言っております。

ただ集まって話すというのでは進みませんから、たまたまイシューを社会・地域連携にしたと思っています。もちろん、社会・地域連携というのは教養研究センターにとっても大きな仕事ですから、これにはきちんと取り組んでいきたいとは思っています。ただし、この社会・地域連携を大学全体としてどうするかというのは、社会・地域連携室の方にパスをして、ぜひ推進していただきたいので、今回のようなセミナーは今後はそちらで開催していただくのが良いのかなと考えています。

逆に、今日ここにおいでの方々が喜んでいただいているのをみて、こうした交流ってものすごく大事だと感じたので、教養研究センターとしては今度は社会・地域連携ではない、別のイシューでいろいろなキャンパス、いろいろな先生方でこうした交流の場がもてればいいのではないかと、そんなふうに思いました。ただ、こうした場は多く的人数である必要はないかと思います。発信は重要ではありますが、関心のない人に発信してもしょうがないので、個々のイシューに関連する興味のある人を集めて、少ない人数でも密なコミュニケーションができればいいのではないかなという思いもあり、今回はどちらかというところクローズで開催しました。今後もこういう活動を続けていければいいと思いました。

種村 ありがとうございます。この3回のセミナーを通して、慶應全体の中で、さまざまな取り組みがあることをつくづく実感しました。この教養研究センターの活動の合言葉は「みいだす・つなげる・ひろげる」

ですが、この内「みいだす」という部分はこの3回のセミナーを通じてかなりの成果が挙げられたのではないかと考えています。今度はそれらをつなげていくということ、ひろげていくということが、課題ではないかと思っています。

「つながる」というのは、さまざまなキャンパスのさまざまな専門の先生方がつながることで、新しいものが生み出されるという意味でのつながるということが今回主に話題になりましたけれども、教養研究センターとしてはもう1つ、学部1～2年の学生を対象に教養教育という形で社会・地域と連携した教育を行っていく上で、さらに上の3～4年、大学院の段階での教育を見据えて、それをどのように位置付けていくかという意味での、つなげるという方向性もあるのではないかと考えています。今後はそちらの方でもさまざまな形でご協力を仰ぎたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

不破 ストーリー、物語は生涯の伴侶となるという言葉がございます。本当にいろいろなプロジェクト、何か夢をもち、いろいろな物語を自分の中で作ったものを、どのようなプロットで、どのような章立てにしていくなかという見取図を今日のセミナーで少し描けたように思います。その1章にもしかすると教養研究センター、SFC、SDM、そして三田、いろいろなキャンパスが、それぞれ1章となり、全部まとめてみたら、素晴らしい本、ストーリーが出来上がるのではないかと、そのようなものがちらっと見えたような気がいたしまして、とてもうれしい場となったと私は勝手に思っております。皆様と共に何か本当にこの場のようなストーリーを一つひとつ重ねて、より大きな物語を編みだしていけるといいなと思います。本当に今日は学期末のお忙しいときにありがとうございます。

おわりに——キャンパス横断の試み

教養研究センター所長 不破 有理

「昨今の学生は〇〇である」と表現するなら、皆さんはどのような二文字をあてはめるでしょうか。往々にして教員による独断と偏見によって、学生は「優秀」ではあるが、往々にして「受身」で、そつがないとラベルを貼ることは容易です。他者との関わり方に「慎重」であるかもしれない学生は、人からの評価を受けることに「臆病」であるのかもしれませんが。ひいては何事にもリスクを冒さず、空気を読むのであれば、「大人」であるのかもしれませんが。バブル期の消費主義は歴史の一事象にすぎない学生にとって、生活はきわめて「地味」。しかし、地味とは「堅実」というプラスの評価も可能です。このような学生気質の変化は、当然ながら、日本の社会の勢いの消失を鋭敏に察知してのことでしょう。2010年度の義塾学生総合センターによる学生生活実態調査によると、学生が感じる不安や悩みの第一位は「学業について」の不安を上回り、「就職や将来の進路について」との答えで、学部平均で60%を超えています。医学部(29・1%)や看護医療学部(43・4%)といった明確な進路がみえる学部は例外として、ほぼすべての学部において将来に対する不安を1年次から抱いています。自分の将来への不安感を抱く学生が頼りとするのは安全策です。授業でも人間関係でも効率を求め、生き急いでいるように感じます。その一方で、大学で大切だと思っているのは教養を得ること、豊かな経験をすることと答える学生も高比率を占めています。これは安易なハウツーものだけでは知的体力が枯渇してしまうであろうことを、おそらく学生も察知しているのです。大学生の時にこそ、じっくりと観察し考える時間と自由があります。しかしながら、人は自由から逃走してしまう。教養研究センターではそのような知的体力をつける基礎の基礎を学ぶ「知のスローフード」を提供する必要があるのではないかと考えています。通常の授業だけでは得られない多様な体験の場を設け、同じ学部の気の知れた仲間だけではない少々広げた人間関係の中で、慎重ながらも堅実に、観察を考察にかえられる教育の機会として、体験型のセミナーを来年度再開する予定です。

今回3回目を迎えた2011年の「社会・地域連携」連



不破 有理氏

続セミナーは教養研究センターのみならず、おそらく慶應義塾が抱える社会・地域連携の取り組みをどのように教育に生かしていくのか、という命題に一定の解を得たいという思いから始まりました。各キャンパスには独自の研究・教育環境があり、風土があります。ひと色の解決策があるわけではないでしょう。しかしながら、今回のセミナーでは素晴らしい知の共有地を作ることができたと自負しています。

システム・デザイン・マネジメント(SDM)研究科の保井俊之先生には、SDMが目指す精査されたシステムズ・アプローチを披歴していただきました。システム思考とデザイン思考とマネジメント思考を掛け合わせて、さまざまな分野横断型の連携によって、つながる力を生かしていく方法論は、社会・地域の活性化の手法として実証されつつありますが、非常に汎用性の高いシステム論で、今後、教養研究センターのめざす教育システムを支える可能性が見出せました。

和気洋子先生の講演タイトル「専門の壁を超える取り組みから」も本セミナーの趣旨に呼応するものでした。同じ学部でもなかなか教員・研究者同士、研究や教育の取り組みについて語る場が限られています。和気先生が長年関わってらっしゃる中国における植林プロジェクト

ト「緑色百里の長城」はそのネーミング自体が夢を誘う響きがあります。四半世紀にわたり継続させるためには、もちろん個人だけの力ではありませんが、先生のしなやかな知性がプロジェクトの曲がり角ごとに威力を発揮したとお見受けしました。そしてプロジェクトを推進するためには、現実を真摯に見つめ観察を通じて新しい公理を導き出す姿勢が肝要で、試行錯誤のプロセスこそ教育である、という重要なお指摘があったと思います。学生を樹木のようにじっくり、ゆっくり育てる学びのありかたをご示唆いただきました。その方法論は福澤文明塾の教育プログラムに発展的に継承されており、教養研究センターが2012年度再開する庄内セミナーの実施プランにも活用できるのではないかと考えます。

第二回セミナーで講師を務めていただいたSFCの飯盛義徳先生にはコメント・質疑の牽引役にもなっていただき、三田キャンパスと日吉キャンパスをつなげて社会地域連携にご尽力なさっている牛島利明先生は社会・地域連携の運営委員会にも長年かかわっておられる立場からコメントをいただき、さらに庄内セミナーの立案者であり、福澤文明塾にもかかわっておられる羽田功先生からもご意見をいただき、まさに役者がそろったセミナーとなりました。

このような横断型のセミナーによって、義塾内の研究・教育の蓄積を共有し合う場を設けることは、あらたなりエゾン・プロジェクトを創出するためにも必要です。まさにつなげる力が創出につながるのです。社会地域連携室の黒田さんからも、今後はセンターとの共催でこのようなセミナーを開催していきたいとご賛同をいただきました。

最後になりましたが、「社会・地域連携セミナー」の実現にむけて動いてくださった教養研究センタースタッフ、柴田浩平、日水邦昭両氏、そしていつもユーモアあふれる司会で場をスムーズに運ぶ大役をこなしてくださる種村和史副所長に御礼申し上げます。

慶應義塾大学教養研究センター主催

第三回 社会・地域連携セミナー

大学教育と社会地域連携のありかたを考える

2012 年 3 月 30 日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 不破有理

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL 045-566-1151 (代表)

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2012 Keio Research Center for Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。